



TITLE:

# 宋初の寄祿官とその周邊 - 宋代官制の理解のために -

AUTHOR(S):

梅原, 郁

---

CITATION:

梅原, 郁. 宋初の寄祿官とその周邊 - 宋代官制の理解のために -. 東方學報 1975, 48: 135-182

ISSUE DATE:

1975-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/66531>

RIGHT:

# 宋初の寄祿官とその周邊

——宋代官制の理解のために——

梅 原 郁

はじめに……………	一三五
一 選人の世界……………	一三八
二 寄祿官の敘遷 その一……………	一四六
三 館職と臺諫……………	一五五
(1) 館職 その一……………	一五五
(2) 館職 その二……………	一六一
(3) 臺諫官……………	一六五
四 寄祿官の敘遷 その二……………	一六七
おわりに……………	一七四

## はじめに

宋代の官制は複雑でわかりにくい部分が多い。おまけに、現在この方面の研究の第一人者である宮崎市定氏が、宋の官制の根本史料である『宋史職官志』を指して「歴代正史の中で最も讀みにくく、難解であろう」と言われるくらいだから、あまり研究者が食指を動かさぬのも仕方あるまい。宮崎氏は十數年以前、『宋史職官志を如何に讀むべきか』という優れた解説書を發表されたが、それに導かれてもなお不明な問題が山積し、本を閉じて長嘆息すること一再にとどまらない。いまさらと笑われるかもしれないが、『宋史』や李燾の『續資治通鑑長編』を眺め続け、宋の官制に馴染むにつれて、や々と二、三のことに氣がついた。

これまで、宋の官制が扱われる場合、大きな體系の中から個別事項をとり出して追及する方法がしばしばであり、一つの官職や官制上の用語についても、縦と横のつながりを切離して解説されがちではなかったろうか。こうした方法では、宋代、とりわけ國初から六代皇帝神宗の、元豐三年（一〇八〇）に行われた官制大改革までの、複雑な制度を正しく、しかも生きて躍動させつつ把えることはむづかしいのではないか。これが私のいだいた疑問の第一点である。

いったい、『宋史』という本は「繁蕪」と清朝考證學者がレッテルを貼るように、長くて甚だ退屈な正史である。少くとも、『史記』や『漢書』は言うに及ばず、『元史』などくらべてもお義理にも面白いとは言えぬ。その理由はいろいろあるが、たとえば列傳にみられる、まるで履歷書を縦にきりつくだような、官職の列擧が指摘できよう。ところが、我慢して読んでみると、一見無味乾燥なこうした官職の羅列が、實はその裏に存外面白い事象を隠しているのではないか。司馬遷や班固とまではゆかなくとも、これはこれで見捨てたものでもない。ある程度官制の體系を把握して読み直すと、そこに豊かな宋人の營みを見出すことができる筈ではないのか。とまあこんな風に思えて來た。これが第二点である。

宋の官制を知ろうとする者が、最も混亂を起すのは、多分、元豐の改革までの北宋百二十年の間であり、とりわけ、實際の職務のない官名が寄祿官として頻出する點であろう。この體系と、それが持つ意味は、宋代研究の專家の間でも、共通の理解を得ていないように思われる。そこでこの小論では、俸給のランクと官僚の序列を示す寄祿官に焦點をあて、範圍を文官と元豐改革以前に絞って、できるだけ詳細に考察を加えてみた。こうした作業は、實は一目瞭然たる表を一枚作ればすむことであろうが、巨大な官制の基幹となる問題だけに、何章かに分けて縷説する結果となった。おまけに、小論の骨子はすでに宮崎氏が、『宋代官制序説』の第九節「敘遷の制」で述べられている。氏の論説にいくばくかを付け加えられるれば望外の幸せである。

宋代の官員は、前代よりも遙かに多くの、異った性格を持つ官職名を一人でそなえていた。その數は高級官僚になるほ

ど増えるのだから厄介であるが、その各々を嚴重に區別してかかることがまず必要になる。いま『資治通鑑』の撰者司馬光を例にとってみよう。周知のように『通鑑』は、英宗の治平二年（一〇六五）に勅命を受け、前後十九年の歳月を費して完成されただけに、各卷數の次に來る司馬光の官職名も何回か變っている。とりあえず開卷劈頭と、卷一九七の二つをあげそれぞれ右側に、官職の種類をつけると次のようになる。

① 朝散大夫右諫議大夫權御史中丞充理檢使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉勅編集（卷一）

② 端明殿學士兼翰林侍讀學士朝散大夫右諫議大夫充集賢殿修撰提舉西京嵩山崇福宮上柱國河內郡開國侯食邑一千八百戶食實封六百戶賜紫金魚袋臣司馬光奉勅編集（卷一九七）

一つ一つの説明は宮崎氏の官制序説をみていただくとして、さしあたり、寄祿官と館職と差遣という三つの範疇を記憶しておいてほしい。宋史職官志は、

（寄祿）官とは俸給のランクづけと位階の順序を示す。（館）職は文學素養豊かなエリートを待遇するもの、そして別に差遣をつくり、内外の職務を行なわせる。

と説明する。<sup>③</sup>宋の官員は、普通には寄祿官と差遣を、優秀な人間は必ずといってよいほどその上に館職を帶びていた。ここで問題とする敘遷の制は、給料と位階を示す寄祿官を上下に配列し、それに従って文官の高等官を昇任または降階させる規則にはかならない。ところで、この場合念頭におくべきは、寄祿官各個の名稱に惑わされぬということである。北宋前半期の官制は、唐中期から五代に及ぶ、革命とも呼ぶべき社會變化の荒波をくぐって歴史的、段階的に形成されて來た。従って新しい社會の現實への適應と、唐までの傳統の保持という二つの側面を一體化している。たとえば、『唐六典』で馴染深い三省六部の長官の一つである吏部尚書や、さらには中書舍人、諫議大夫などという官職名が、その中味を完全に取り去って、寄祿官としてたち現われるのである。そこで、我々は、當面、寄祿官の各官職名からくるイメージを

のぞくことが大切である。亂暴に言えば、各官職名をA1とかA3とかC1とかF4とか、すべて記號だと思おう方が望ましい。要するに元豐までの寄祿官名と唐の六典で作られたイメージをダブらせてはならないのである。

なおつけ加えれば、官と職と差遣は、一應次元の異なる三つの範疇と考えてよいが、實はこの三者は角錐の三面にも似て、互に影響しあっているのである。結論の先どりになるが、全體としてみれば、古さと新しさを調和させた北宋初の官制の巧妙さには舌をまかされる。官制からだけでも、宋の文化の高度さと優秀性をかいま見ることができるといえばいささか皮相にすぎるであろうか。

## 一 選人の世界

宋代の文官は、選人と京官と朝官に大別される。選人とは、唐代には、科擧に合格し、吏部で行なわれる身言書判の任用試験を待つ者を指した。つまり候選人が原義である。唐末五代の節度使支配は、從來の州縣制と並行する形で、幕職官の體制を産み出したが、宋に入ると新しい皇帝支配體制のもとに両者が整理統合される。宋の文官優先主義は、幕職州縣官と總稱されるようになったこれら地方官にも浸透する。他方、科擧制の廣範かつ定期的實施は、前代とは較べものにならぬ多數の進士、諸科の合格者を産み、また、恩蔭その他の官員登用制度が整うと、唐のような候選人のあり方では不都合が生じる。すでに五代の後唐から後周に至る間に、候選人を地方下級官に任用することがほぼ定着していた<sup>⑤</sup>。そして全國統一が達成された宋の二代皇帝太宗の時代には、科擧をはじめとする文官任用者は、僅かの例外を除き、まず選人の身分を與えられ、幕職州縣官のポストにつくことが定制化したのであった。幕職州縣官の歴史的沿革は、これまた宮崎市定氏によって適確に浮彫りされているが、小論と關係する敍遷の面に限っていえば、なお十分に解明されぬ部分も殘されて

いる。ここではとりあえず行論に必要な事柄だけをとりあげておきたい。

幕職州縣官は四等七資といわれるように、兩使職官、初等職官、令錄、判司簿尉の四グループに分れ、さらに兩使職官が三つ、令錄が二つに細分されて、七段階をなす(第一表)<sup>(7)</sup>。この区分は、選人のおおまかな上下位置をあらわし、選人が京官に變る時をはじめ、しばしば史料面に登場する。

しかし、第一表だけでは選人の實體は殆どわからない。宋初の選人は、吏部の流内銓と呼ぶ部局で、銓選、つまり履歷審査と選拔試験をへて、幕職州縣官の實務につく。その概略が第二表である。<sup>(8)</sup>選人七資の最下位である判司簿尉は、東京開封府を除く、西

・南・北三京の軍巡判官、各州の司戸、司法、司理參軍、各縣の主簿と縣尉の略稱である。これら各職務は、軍巡判官以外、各々がさらに何段階かに分れる。この時州縣の等級が意味を

第一表 幕職州縣官序列一覽表

	幕 職 州 縣 官 名	元豐寄祿格
兩 使 職 官	留守判官・三京府判官 節度判官・觀察判官	承 直 郎
	節度掌書記・觀察文使 防禦判官・團練判官	儒 林 郎
	京府留守推官・節度推官 觀察推官・軍事判官	文 林 郎
初等職官	防禦推官・團練推官 軍事推官・軍監判官	從 事 郎
令 錄	縣令・錄事參軍	從 政 郎
	試銜縣令・知錄事參軍事	修 職 郎
判司簿尉	三京軍巡判官 司理・司戸・ 司法參軍・主簿・縣尉	迪 功 郎

第二表 幕職州縣官銓選一覽表 (左側の符號は州縣の等級)

	簿 尉	縣 令	司理判司	錄事參軍	判 司	各 判 官	各 推 官	出 身
1		次 赤			兩 府	節度觀察		
2		畿	兩 府			防 團		
3	赤	次 畿			諸 府		初等職官	進士・制舉
4		望	諸 府					九 經
5	次赤・畿	緊・上	輔	緊・上				五經~明法
6	次 畿	中	雄・望	中				
7	緊・望	中下・下	緊・上	中下・下				學 究
8	上		中・中下					
9	中		下					
10	中下・下							

持つてくる。宋では、國都を含む四京の縣に赤、畿という特別のランクを與えるほか、縣は四千戸以下、千乃至五百戸きざみで望、緊、上、中、中下、下と等級づける。縣の上の州もまた、輔、望、雄、緊、上、中、中下、下と、大小劇閑に従って區分され、これら上下關係が、そのまま、縣の主簿縣尉、州の司戸以下の曹掾の上下をあらわすことになる。幕職州縣官の最も下のポストは、だから下縣か中下縣の縣尉というわけだが、科擧合格者はこんなところから出發するのではない。下縣の簿尉に任命される者は、進納人（買官した者）と流外（胥吏出身）であり、その上も、中下州までの判司は、攝官（主として廣南で行われる現地任用）と恩蔭出身で占められる。有出身と總稱される科擧出身者は進士と諸科に二分される。諸科出身は、最も低位の學究出身で中州の判司、上縣の簿尉、高位の九經出身で緊州の判司、望縣の簿尉につけられる。これに對して進士出身者には望州の判司と次畿縣の簿尉が用意される。實際には普通以上の成績で進士に合格した優秀分子には、兩使職官中の節度推官、觀察推官などが與えられ、また次畿縣の主簿から出發しても、そのあとの出世のスピードは、兩使職官のものと大差ないように配慮されていた。北宋中ばの文集からアトランダムに幾つか實例を抜き出しておう。

十一世紀の半ば、山東は泰山の南麓で學を講じ、范仲淹、韓琦らの同調者であつた石介（祖蔭）は、天聖八年（一〇三〇）、二十六歳で進士甲科（上位グループ）に合格するや、鄆州觀察推官から南京留守推官、そして某軍節度掌書記と、圖表通りの道を進んだ<sup>⑩</sup>。石介の場合、實際は節度掌書記につかず、父の代りに數ランク下の嘉州軍事推官になったのだが、京官に改官する時には、節度掌書記として取扱われている。また、景祐元年（一〇三四）進士に合格した、常州晉陵出身、文名高い丁寶臣は、峽州軍事推官、淮南節度掌書記、杭州觀察判官のコースを通じて改官している<sup>⑪</sup>。

次に諸科出身を二例あげよう。咸平二年（九九九）明經科から選人になった呂士元という男の官歴は誠に悠長である。すなわち、潭州醴陵尉（緊）、廬州司理參軍（上）、寧州彭原縣令（緊）、廣州新會縣令（下）、湖州司理參軍（上）、泗州錄事參軍

(上)、吉州太和縣令(望)、秦州隴城縣令(中)と、官員生活のすべてを判司簿尉とその上の令錄に終始し、しかもその動き方は波形に上下している。<sup>12</sup>汚職や行政上のミスをはじめとした處分をたびたび受け、明經出身というハンディが加わってこのような結果になったのであろう。

いま一つ、蘇舜欽が科擧同年の朱處仁の父咸熙のために書いた墓誌銘をひこう。<sup>13</sup>朱咸熙は咸平三年(一〇〇〇)の擧究出身だが、漳州定遠縣主簿(望)、綿州司法參軍(上)、博州司理參軍(上)、濠州錄事參軍(上)、耀州淳化縣令(中)と、五任約十五年、几帳面に七資の下二階をゆったりと歩んでいる。

諸科出身にみられる昇進の過程は、恩蔭の場合も大同小異である。例えば、歐陽脩が綴る、四十才で恩蔭を貰った狄栗は、英州眞陽縣主簿(望)、安州應城縣尉(中)、襄州穀城縣令(緊)と段階を一步一步あがっている。<sup>14</sup>もっとも、恩蔭出身は、元來有力者の子弟や親族が多いのだから、こつこつと勉強しただけの諸科出身よりも、後に述べる一定數の擧主(推薦保證人)が得やすかったらしく、割合早く京官にとびあがることも珍らしくなかった。

ところで、胥吏出身を始めとする無出身グループの實例を墓誌銘類から探し出すのは困難である。胥吏自身が自己の履歴をことさら書き連ね、また有名文人が、それをもとに潤筆料を貰って碑銘を書くことはまず稀であったと考えて大過なからう。しかし宋史職官志卷一六九の流外出官法で明らかのように、三館秘閣などの王立アカデミーをはじめ、審刑院、審官院から御史臺と、胥吏が官員の身分を取得するいわゆる出職の道がひらかれ、その數は必ずしも少くなかったと推定される。選人が幕職州縣官のポストをのぼってゆく規定は、宋史職官志卷百六十九の「吏部流内銓諸色入流及循資磨勘選格入流」という長い見出し項目のところに列記されている。ここの文章には良く判らぬ部分があるがあらまし以下のように纏められよう。

幕職州縣官が職務年限によってポスト(この場合は差遣)をあがって行くことを循資(資格に循いすすむ)と言う。ここでは循



資が常調以下幾つかに分類される。

常調とは、一任期を了えるごとに、段階を一つ一つあがって行く方法である。州縣の大小を問わず、判司簿尉の常調は次のように決められている。<sup>15)</sup>

- ①科擧出身は二任四考、②それ以外は二任五考、③攝官で判司から出る者は三任七考、でいずれも録事參軍とする。
- ④もし擧主四人か合使擧主が二人あればいずれも縣令に差注する。⑤胥吏出身は四任十考で録事參軍、⑥買官の出身は三任七考、うち科擧の地方中央試の落第者は二任五考で下州の令錄に入れ、なお監當差遣に任ずる。

宋の一任は、普通は閏月を省いて三周年を指し、これを勤めあげると「得資」（資格を得る）と名づけ、次の資序にあがる。この一任中、滿一年ごとに勤務考査が行われるたて前で、これが「考」である。<sup>17)</sup>恐らく、すべての幕職官の任期が一律に三年というわけでもなく、また任期中にポストの移動や、服喪離職なども起るため、任と考の組合せが必要であったと思われる。常調では、科擧出身の判司簿尉は六年以上つとめて録事參軍に進むわけで、先の呂士元をはじめとした實例とほぼ合致する。この時、規定數の連帶保證人があれば、録事參軍をとびこして縣令に行く、狄栗はそうした一例と考えられる。

常調以外に廣く行われた昇進法に、酬獎と奏薦がある。前者は勤務評定の際、殊考すなわち好成績をおさめた者に適用される。その内容は盜賊の逮捕數、鹽稅や商稅の増徴をはじめ多方面に及び、それぞれに基準が設けられていた。判司簿尉で酬獎の恩典を受けると、初任の者は、その任期を修了して知令錄に、二任目の者は二考以上で正令錄にあげられる。これは常調より一任期分の優遇措置である。<sup>18)</sup>

後者は一定の考數をへ、しかも規定數の保證人がいた場合にとられる方法である。三人の擧主を持つ判司簿尉は、有出身は四考、無出身は六考で初等職官に、それが六考、七考であれば兩使職官に進む。<sup>19)</sup>すでにここに於いて擧主を持つこと

の有利さは歴然としている。

さて、選人にとって最大の關心事は、次の身分、すなわち京官に上ることであつた。京官になってこそ始めて一人前の文官官僚として扱われ、士大夫社會を大手を振って歩けるのである。選人が京官になることを宋では選人改官、略して單に改官と呼ぶ。その手續は循資の磨勘の條に述べられている。

判司簿尉は七考、知令錄と職官は六考して京官の保證人が五人——うち一人は轉運使、轉運副使、提點刑獄——あれば、どちらも、磨勘して天子が謁見し、それ相當の京官か朝官に轉ずる。<sup>(20)</sup>

廣い意味では、選人が職階をあがつて行く循資の中の特例の一つとして、この磨勘による選人改官という條項が作られたのだが、ここに使われている「磨勘」の二字には若干の説明が必要であらう。

宋代、わけでも銓選關係の記事には、いかにも吏語から出たとみえるこの言葉が頻出する。最近、古垣光一氏は、三代皇帝眞宗時代の京朝官の磨勘について論考を發表され、それは考課と同義に使用されたと述べられている。<sup>(21)</sup>これは、方向としては正しいが制度史研究に往々見られる、必要條件と十分條件のどこかが缺けている説明のような氣がする。筆者も、宋代の史料に接した時から「磨勘」の二字が心にひかかり、一度徹底的に調べようと考えているが、本論ではそのごく一部分を書くにとどめたい。

磨勘 *mo-kan* 字面も發音も、決して雅ではない。この二字は、元來はみがきあげ、つきあわせしらべる、つまり徹底的に書類検査をするという動詞に使われた。「左藏庫の出納帳簿をすみやかに調べあげてしまふ（磨勘了當）」とか、「四榷場の入中錢銀數を磨勘する」という用例は別に珍らしくなく、<sup>(22)</sup>だいいち三司（大藏省）の會計検査院が磨勘司と呼ばれているのである。この二字が銓選の用語として定着しはじめるのはやはり五代であらう。後唐時代になると選曹磨勘や磨勘選人という句が急に増加し、これが宋に繼承される。<sup>(23)</sup>古垣氏が考證されたように、宋初、まだ官制が整わない時期、京朝

官と幕職州縣官の考課は磨勘院と名のつく役所で行われた。淳化四年（九九三）それが審官院と考課院に分化改名された時、東晉謝安二十七世の孫と稱する謝泌は、「磨勘の名は典訓に非ざる也<sup>24</sup>」と言い、やや遅れて保守派の宰相田錫も、吏部の考功でやるべき考課を磨勘司が行うことを非難して、磨勘司は雅稱でないと指適する<sup>25</sup>。にもかかわらず、宋では、官員の勤務評定に關連して磨勘を使うことが一般化し、次には官崎氏が言われるように、年功によって官位があがる意味に擴がる。磨勘が考課と必ずしも同義ではないことは、上に述べた選人循資の磨勘を考課とおきかえにくいことから推測できる。つまり磨勘はこれまで使われた考課をも含みこみ、選人が改官する時、京朝官が轉官する時に行なわれるかなり煩雜な一連の手續の總稱と考えられるのである。磨勘の詳細は、『慶元條法事類』の磨勘陞改や『吏部條法』を使って改めて述べるとして、當面の選人磨勘につき宋初の一例をあげておこう。

宋初、選人の磨勘改官は吏部南曹、流内銓と門下省が關係した。それぞれの部局で、選人の履歷、在任中の成績、賞罰の有無などを詳細に記した「家狀」や保證人の推薦の審査が行われる。期間は、各部局順に八日、十五日、七日、合計一ヶ月と限られ<sup>26</sup>、審査がすむと書類は皇帝の手元に送られる。皇帝は選人を親しく引對（謁見）<sup>27</sup>し、京官に改めると同時に、主として知縣のポストを與える。一回に引見される選人は十人單位であり、從つて年間に改官される數も、そう多くはない<sup>28</sup>。殿試によって天子の門生という關係を結ばれた科擧出身者は、選人―幕職州縣官といういわば見習い期間を経験し、磨勘引對によって再び天子じきじきの恩恵を與えられることになる。新しい君主獨裁體制の保持のための無形の効果が、そこに期待されていたと考えられる。

話を元に戻そう。選人の磨勘改官は、必ずしも幕職州縣官の七階を下から上っていつて最後に行われるわけではない。改官のために本來は七階の選人のランクが五階梯に縮められ、そのどこからでも、京官になることができた。これを示すのが第三表である<sup>30</sup>。つまり、幕職の各ランクから、京官各ランクに横すべりできるように配慮されているので、このから

第三表 選人磨勘改官表 (上段有出身・下段無出身)

	7 考	不及7考	6 考	不及6考	不及5考	不及3考
判 司 簿 尉	大 理 事 丞 衛 尉 寺 丞	光 祿 寺 丞 大 理 評 事			大 理 評 事 奉 禮 郎	奉 禮 郎 將 作 監 主 簿
初 等 職 官 知 令 錄			大 理 寺 丞 衛 尉 寺 丞	光 祿 寺 丞 大 理 評 事		大 理 評 事 奉 禮 郎
兩 使 職 官 知 令 錄			著 作 佐 郎 大 理 寺 丞	大 理 寺 丞 衛 尉 寺 丞		光 祿 寺 丞 大 理 評 事
支 掌 防 團 判 官			太 子 中 允 著 作 佐 郎	著 作 佐 郎 大 理 寺 丞		
節 察 判 官			太 常 丞 太 子 中 允	太 子 中 允 著 作 佐 郎		

くりが呑みこめていないと、職官志の京官の叙遷の理解が曖昧になる恐れがある。従って選人は、七階を縦にあげりつつ、同時に條件次第ではどの位置からでも京官になれた。このあたりの巧みさも感心させられる。

ところでその条件とは一定の職務年限と舉主、特に後者を指す。宋の文集をひもとくと、舉薦とか奏舉などの表題をつけた推薦文が数多く載っていることに氣付く。「まだ用いぬ先は舉主を擇び、任用した後は舉主を責める」<sup>(31)</sup>。古來、中國では、有力な連帶保證人の個人的つながりを軸にして支配體制を組んで行く考えが強い。新興の地主階級を再編成したと考えられる宋の皇帝權力は、我が朝の人を用いる法は、一に舉主、二に舉主<sup>(32)</sup>と書かれているように、保舉の制度を十分に活用したところに一つの特色がある。最初は臨時に、次には定期的に、官員は官職の上下に従って、一定数の人物を推薦することが義務づけられ、奏舉とか、舉官といった言葉が氾濫し始める<sup>(33)</sup>。それは單なる形式にとどまらず、保證した人物が不都合なことを起したり、保證事實に相違した時は共同責任をとらされた。それでも有力者の保舉を求め、その門におしかける所謂「奔競の弊」が一般化するのを避けることはできない。宋の官僚の系譜はもとより、政治の場における生きた官僚の動きを理解するためには、この保舉という問題に今少し注意を拂う必要があろう。

先の職官志の選人磨勘の條では、判司簿尉七考、知令錄と職官は六考、京官出

人が改官の條件であつた。しかし、第三表に明らかなように、別に判司簿尉には、七考未滿、五考、三考未滿の條件もあり、令錄と職官にも三考未滿の規定がみえる。これを現實の面からみると、判司簿尉から、大理寺丞に遷官する者よりも、大理評事や、奉禮郎に遷官している者の方が壓倒的に多い。進士出身者の多くは選人二任程度で、有力な數人の舉主を得て改官する方が普通と考えてよさそうである。

## 二 寄祿官の敘遷 その一

これから本題の寄祿官敘遷に入るわけだが、宋史職官志では「京官至三師敘遷之制」という標題が與えられている。選人から改官した文官は、京官と總稱される身分集團に入る。唐の京官は在京の職事官を意味したが、宋になると從九品、正九品、從八品相當の未常參官を指すように變る。<sup>(34)</sup> いちおう、高等官の下層ランクと考えてよからう。これを元豐以前の寄祿官でいえば、最も低い將作監丞から、最も高い著作佐郎乃至秘書郎まで、合計十(嚴密には十二)に相當する。先にもふれたように、京官になつてはじめて皇城の門を馬に乗って通れるなど、<sup>(35)</sup> 一人前の文官として扱われることになる。京官の上は朝官、つまり陞朝官だが、宋では、京官を未常參官、朝官以上を常參官と區別する言い方もある。定期的に參内する常參官の枠は甚だ廣いため、寄祿官の順序を表わす時には、朝官、員郎、正郎、卿監、侍從という區分が使われる。宋の文獻では、しばしば、京朝官や侍從の語にぶつかるが、それは廣義に、普通名詞として使われるか、狹義に、寄祿階をふまえて用いられるかを識別してかかる必要がある。

選人の時から、有出身と無出身が截然と區別されていたことは前章で明らかであろう。京官にのぼっても、それは變らない。まず宋代官僚の主流、進士出身者について、選人改官前後から、昇進經過を跡づけて行こう。

宋會要の貢擧の部分には、科擧制が軌道に乗り始めた太宗の太平興國二年（九七七）以後、進士合格者がどのような初任官につけられたかを列記している。この記事によっても太宗から眞宗時代の文官體制の擴大と滲透、仁宗時代の所謂「員多闕少<sup>ポスト</sup>」と言われる冗官冗員などを讀みとることができる。それはともかく、仁宗慶曆四年（一〇四四）、王安石が第四位の成績で合格した貢擧を例にとろう。

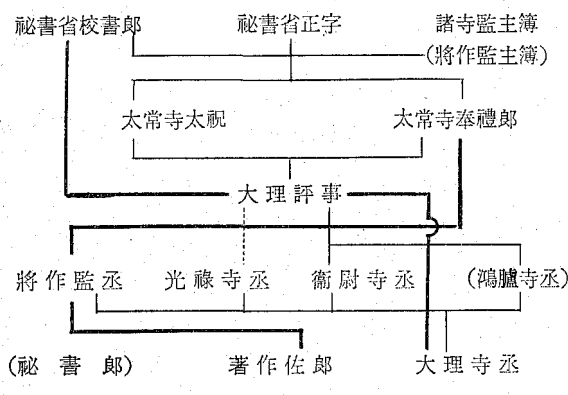
四月二十三日。詔。新及第進士第一人楊寔爲將作監丞、第二人王珪爲大理評事、第三人韓絳爲太子中允、並通判。第四人王安石爲校書郎、第五人曾公定<sup>亮</sup>爲奉禮郎、並僉書諸州判官事。第六人已下兩使職官。第二甲初等職官。第三甲試銜知縣。第三<sup>四</sup>甲試銜簿尉。第五甲判司簿尉。（選擧二ノ七）

一位から五位までの成績最高位の進士には、ただちに京官の寄祿官が授けられ、しかも、狀元、榜眼、探花は、幕職州縣官はおろか、京官の初任差遣である知縣をとびこし、いきなり州の通判の差遣（資序）を與えられる。六位以下の優等生を含む第一甲から第五甲までの四百三十一人には、すべて幕職州縣官とそれに準ずる待遇、言いかえれば選人と準京官の地位につけられたのである。準京官と言ったのは、ここにみられる試銜を指すが、これについても若干の説明がいるだろう。

官制用語としての「試」は、本來はその人が持つべき位階と實際の職務の品數とが一致しない時に使われる。宋では、（差遣の）除授は、すべて寄祿官と比定する。一品以上高い時は行とし、一品下の時は守とし、二品以下低い時は試とする。<sup>(97)</sup>

と決められていた。ここで言う試銜も、大きくはこの範圍に含まれるが、やや異った意味をもっている。いったい試銜は、宋初には、舊五代十國の後裔や、有力節度使の子弟を體制内に組みこむ時に利用された。<sup>(98)</sup>それが、官制の整備とともに選人と京官の橋渡しともいふべき制度にきりかわってゆく。科擧の合格者表でみる限り、こうした試銜が恒常的に出始

第四表 京官寄祿官遷官略表  
(太線 有出身 細線 無出身 破線 特殊任用)



〔元豐寄祿格〕

承務郎  
(從9品)

承奉郎  
(從9品)

承事郎  
(正9品)

宣義郎  
(從8品)

宣德郎  
(從8品)

めるのは景祐元年（一〇三四）からである。では具體的にどういふことなのか。それは下級京官の、大理評事、校書郎、正字、將作監主簿に試の字を冠せ、本當は選人なのに京官待遇にして、知縣や判司簿尉の差遣に充てることである。但し試という字がついても、幕職州縣官から知縣、通判にあがり、寄祿官を遷轉する場合には、つかぬものと同じ扱いがされる。試大理評事も大理評事も、等しく大理寺丞に昇進するわけである。何故こんな制度があるかと言うと、上述したように、選人は五階梯のどこからでも京官に改官できる。中級選人の兩使職官は著作佐郎に改官されるが、兩使職官になるためには、判司簿尉から令錄とランクをあがる一定の年限が必要である。一方進士出身者をいきなり試秘書省校書郎として、判司簿尉をやらせ、大理評事から大理寺丞と遷轉し、その間知縣などの差遣をやらせても、年限の實質ではたいして變らない。進士出身者に權威を持たせるためもあるが、こうした事情で北宋中期には試銜が普遍化したのである。

第四表

省	秘書	作	將
書	祕	祕	祕

さて、第三表のように、選人はスライド的に京官に改官されて来るけれども、いきなり大理寺丞や著作佐郎になるのは、限られたエリートだけである。進士出身者の多くは、五考か三考の判司簿尉から、大理評事か秘書省校書郎に改官した。宋史列傳でみると、北宋の文官に大理評事という寄祿官名が壓倒的に多いのはこのためである。逆にいえば、傳記類で、京官の初官が大理評事であれば、標準的な進み方をしている者と受取れることにもなる。これに對して、著作佐郎や大理寺丞で改官した者は、幕職官の上の方から來た優秀分子、幕職をへずにいきなり、釋褐して將作監丞や大理評事になっておれば、科擧最上位の俊秀と見當が

第五表 北宋中期恩蔭略表

	子	期親・尊屬	餘	屬
宰相・使相	將作監丞	太常寺太祝郎 太常寺奉禮郎	試	銜
僕射・尙書	太祝・奉禮郎	祕書省校書郎 祕書省正字	試	銜
三司使・翰林學士・侍讀 侍講・龍圖樞密直學士・ 丞郎	正字	將作監主簿	試	銜・齋郎
給舍・諫議・知制誥 待制・卿監・三司副使	將作監主簿	試	監・齋郎	

つき、改官が祕書省校書郎であれば普通以下と見做せる。

それでは祕書省正字以下の寄祿官名は何のためにあるのか。それは恩蔭を中心とした無出身者のために用意された寄祿官にはかならない。科擧、その中でも進士科を出發點とした文臣官僚の社會では、進士出身でなければ何かにつけて肩身の狭い思いをさせられた。科擧制の定着は、世襲の枠をはずし、個人の能力を第一と

考える、新しい時代の表徴ではあったが、現實にはそれだけでは濟まず、中央・地方とも、下級官僚は豫想以上に恩蔭出身者で占められていた。恩蔭出身は、宋の支配體制が固まり、官僚制が整備されるに従い、増加の一途を辿る。北宋中ば、冗官を問題にする奏議で、恩蔭削減をうたわぬものはないと言っても過言でない。いま一例として、長編卷一四五にひく慶曆三年（一〇四三）制定の、高級文官に與えられる恩蔭寄祿官を表示しよう。將作監主簿や太常寺太祝、それに祕書省正字などの寄祿官名が有力者の子弟のためということは一目瞭然であろう。こうした寄祿官を持つ若者をみれば、當時の人には、ああ大臣の子弟か縁者とすぐ見當がついたと思われる。

次に第四表に戻って、そこにのせた無出身者の敍遷に注意していただきたい。宋の官制の巧緻さの一つに組合せの妙をあげてよからう。有出身も無出身も同じ大理評事、大理寺丞の官を貰う。それだけでは、どちらとも判別ができない。しかし、その前後を見れば區別は容易という仕組みになっている、などというのは全く憎らしい。ところがこうした中で、衛尉寺丞だけは一貫して無出身の人が持つ官位と考えられる。つまり衛尉寺丞には、有力者の子弟が、太祝あたりから大理評事をへて上って來る場合



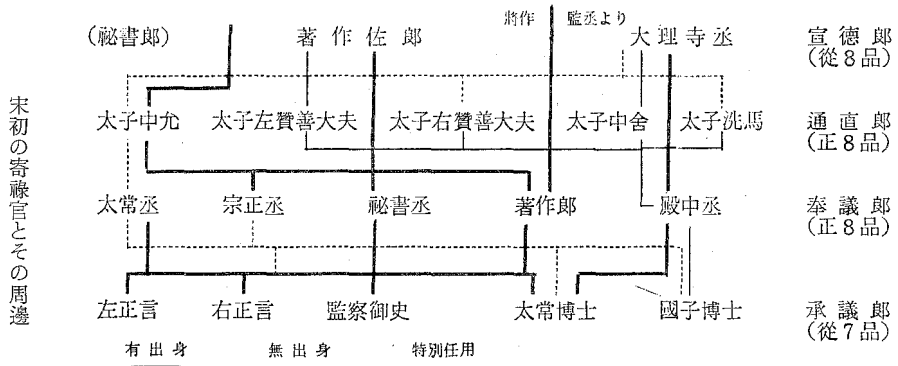
と、幕職州縣官で無出身の者が改官した場合が豫想される。特に後者には、科擧の主流からは離れるが、實力でのしあがって來た、いわば力とかげのある人物を頭に描くことも可能である。

これまで、有出身者とは科擧出身者として敘述を進めて來た。宮崎氏も、有出身は進士科のほか、九經、五經、三禮、三傳、學究一經、そして明法科を含むとされる。しかし、彼らいわゆる諸科出身者が、有出身として扱われたかどうか、甚だ疑わしい。選人の實例は第一章で二つあげたが、彼らが京官になってからの轉官を調べると、まさに無出身の規定通り動いていることが判る。たまたま宋史に明法科出身の靳懷德という男の傳がのっている。彼は太平興國年間、明法に合格し廣安軍判官から鴻臚寺丞に改官している。將作監丞のランクは、正式には諸寺監丞と呼ばれているから、別に鴻臚寺丞があつても差支えないわけだが、實際には、これは大變珍らしいケースである。こうした寄祿官名がつけられていることは、明法出身を隠にあらわそうとの意圖があつてではなからうか。

第四表以下の各表に見られる通り、京官以上は寄祿階を昇進——不法行爲があれば降階——する。それは轉官、遷官あるいは敘遷、遷轉などと表現される。宋史をはじめ墓誌や行狀で、遷の下に寄祿官名が來れば寄祿階をあがる意味であり、累遷とは、何段階かの寄祿官を昇進したが、その名稱は省くという時に使われる。遷官つまり、京朝官の磨勘轉官が何年ごとに行なわれるかは、時代によって一様でなく、また侍從以上と以下とも異なる。眞宗のはじめから元豐までの時期は、京朝官の磨勘轉官は大體三年に一回行われていたと考へてはば正しかろう。<sup>41</sup> 京朝官の差遣として最も多い、知縣、通判、知州は三年一任期であり、差遣と寄祿の移動が同時に組み合わされていたとしても不思議はない。ただ、英宗以後、京官より上は、四年一轉といった定義をする史料が増え、それが一般化したようである。<sup>42</sup> 知縣などの任期が二年で一任となる場合には轉官を四年一回にすることが便利だったともみられるが、詳しくは別に論ずることにしたい。

その轉官は、さらに有出身人は超資、無出身人は逐資と區分される。<sup>43</sup> 急行と各驛停車を連想すればよい。有出身者の標

第六表 朝官寄祿官遷官略表



準コースには、祕書省校書郎から大理評事、大理寺丞と進むものと、太常寺奉禮郎から、將作監丞、著作佐郎と行く二つがある。選人改官の時の位置によって、はじめの一つか二つを経ぬ者もいることは言うまでもなからう。この二つのコー

スでは後者の方が格が高い。これに對して無出身者は、將作監主簿ないし祕書省正字から、まず太常寺奉禮郎、そこで太常寺太祝が加わって大理評事、次が衛尉寺か光祿寺の丞、そして大理寺丞に到達する。なお職官志では、無出身者が館職あるいは特別の差遣を持つ場合のことを併記するが、これについては後章でまとめてふれる。

京官をおえた者は朝官に遷る。はじめに言ったように、陞朝官というと、常參官すべてが入ってしまう廣い呼稱になるが、小論では朝官を寄祿階における狹義の意味に使用する。正八品の太子洗馬から、從七品の太常博士までの三ランク十二の寄祿官名がそれである。朝官は、太子の名と關係する小朝官とそれ以外の大朝官に區別される時もある。

著作佐郎と大理寺丞まで来た有出身者は、祕書丞から太常博士か、殿中丞から同じく太常博士へと轉ずるのが常道である。一方無出身者の大部分は、大理寺丞から太子中舍、殿中丞を経て國子博士に進む(第六表)。朝官においても、各寄祿官はいろいろな意味を隠しているように思われる。

太子官ランクの先頭にある太子中允をとってみよう。職官志の敘遷で探す限りでは、この位階は大理丞で無出身者が、ある場合に遷官するとだけしか書いてない。しかし、南宋の史料にはじめて京官となった選人が經筵官と臺諫官であれば、すべて太子中

允に任ずると見える。<sup>(46)</sup>幾つかの實例を當ると次のようなことがわかる。

一つは支掌防團節察判官と呼ばれる上級の幕職州縣官が、京官をとばして改官即朝官を與えられる場合である。前章であげた丁寶臣は杭州觀察判官から太子中允へ改官しているし、石介もまた特旨で節度掌書記格から太子中允に遷っている。石介の場合は國士監直講という低い經筵官を持つこと、丁寶臣の場合は、文名と歐陽脩、王安石など有力な舉主があったためと推定される。さらにつけ加えれば、北宋中期、范仲淹のブレーンとして文章の巧みさを謳われた尹洙<sup>(47)</sup>も、節度掌書記で次章にのべる館職の試験をうけ、館閣校勘を授けられて太子中允になっている。<sup>(48)</sup>次に京官の寄祿を上って來た者の例を拾おう。これは二つに分けられる。參知政事<sup>(49)</sup>（副宰相）李穆の息子の行簡は、規定通り恩蔭で將作監丞を貰っていたが、時の最高權力者王旦の推輓によって太子中允を獲得した。<sup>(50)</sup>同じような例は、大酒と奇行をもって鳴る仁宗時代の石曼卿にも見られる。彼は科擧に三回失敗し、天子の特恩と宰相張知白の要請で、下級武官から文官の太常寺太祝にのりかわり<sup>(51)</sup>（換資）、館閣校勘の館職をとり、大理寺丞から太子中允にとりたてられた。

いま一つは、職官志が言う大理評事から太子中允に遷る場合である。宋會要選舉の、召試除職（館職試験）をくつてみると、大理評事で館職テストに合格した者は、殆どが太子中允に任ぜられたことに氣づく。新唐書の撰者宋祁などはその代表である。<sup>(52)</sup>そうしてみると、太子中允の位階は、履歷の中でプラスに働く重要な意味を持っていたと考えることができよう。

五種類の小朝官のうち、次の太子右贊善大夫がまた少し變っている。職官志によれば、それは無出身の皇族や兩府の家と大理寺丞で司法關係又は中書の堂後宮の差遣を持つ者に與えらるゝとある。のちにひく薛長孺のように大臣のうすい血縁にあたる恩蔭出身や、胥吏經驗者という含みを、この寄祿官は具えると思われる。また左贊善大夫は著作佐郎の無出身者——理屈からいって上級幕職からの改官者——や、無出身の大理寺丞から宰執の推擧した人物がついた。いづれにして

も太子贊善大夫というのは特殊な寄祿官と見做して大過なかう。残る太子中舎は主として恩蔭出の無出身が通るポピュラーな官であるのに對し、太子洗馬はこのランクで一番低い、あまり有難くない官であったと言えそうである。<sup>①</sup>

小朝官の上には、殿中丞、秘書丞、宗正丞、太常丞、著作郎の五寄祿官が一行にならぶ。はじめの二つは多くの官員が通るありきたりの官、宗正丞は殆どなく、太常丞は太子諸官で館職を帯びる者がつけられる特殊なものだから除き、ここでは著作郎に若干ふれておきたい。

著作郎は進士科のトップ、狀元が將作監丞について授けられる名譽ある位階である。これを狀元以外の者に與える時は特別の勅命を要した。従つて著作郎になつた者は、次に太常博士には進まず、特別待遇の諫官グループに遷り、スピード出世が約束されることになる。<sup>②</sup>

殿中丞、秘書丞などが遷る位階は有出身は太常博士、無出身なら國子博士と決められている。朝官最後のランクであるこのあたりから急行と普通は外見からも截然と區別できるようになり、急行は更に幾種類かの特急を派出する。著作郎はもとより、太常丞や秘書丞でも、特急券が手に入れば、太常博士に進まずに、臺諫官に任用される。出身別や選人改官の時の條件によつて、まちまちの京官寄祿階から出發した官員たちは、ここに至つて大きく太常博士と國子博士に二分され、それに臺諫官が加わるスッキリした姿となる。

ここでもいままで續説して來た寄祿階昇進の實例をいくつか表にしてならべておこう（第七表）。また文官全部の體系からみれば三分の一にも達しない從七品のここまででさえ、無出身者にとつては長い長い道のであるということが理解されるであらう。選人改官から數えて、有出身者は多くて四遷、普通三遷、ほぼ十年から十二年で太常博士になるのに較べ、無出身は六遷から七遷、二十年内外の歳月をかけてようやく國子博士に辿りつくのである。なおこの表の數例からでも、この章のはじめに述べたように、科擧の諸科出身は、無出身者の規定で遷官し、無出身者が必ず來る國子博士に達しているこ

第七表 北 宋 敘 遷 實 例

王 安 石				薛 長 孺 (薛奎の恩蔭)			
西紀	官	差 遣	職		官	差 遣	
慶曆2 1042	進士甲科	淮南簽判			郊社齋郎		
45	大理評事	知鄆縣			將作監主簿		
50	殿中丞	通判舒州			太常寺太祝	知臨城縣	
		群牧判官			大理評事		
55	太常博士	知常州			衛尉寺丞	漢州 通判 湖州 滑州	
		提點刑獄			大理寺丞		
		度支判官			太子右贊善大夫		
		判三班院	直集賢院 知制誥				
63	工部郎中 (服喪)	知江寧府			殿中丞	知彭州	
68	右諫議大夫	參知政事	翰林學士		國士博士	通判成都	
69	禮部侍郎	同平章事	監修國史		虞部員外郎		
74	吏部尚書	知江寧府	觀文殿大學士		比部員外郎		
75		同平章事	昭文館大學士		駕部員外郎		
76	左僕射					歿年61	
77	檢校太傅	判江寧府	觀文殿大學士 歿年68			歐陽文忠公集卷34	
司 馬 光				胡 儀			
西紀	官	差 遣	職		官	差 遣	
寶元1 1038	進士甲科	華州判官			明經中第	涇州長原尉	
	奉禮郎 (服喪)					潁川法曹參軍	
45	將作監主簿	權知韋城縣			大理評事	知海陵縣	
46	大理評事	國子直講			光祿寺丞	刑部詳覆官	
49		同知太常禮院	館閣校勘		大理寺丞	三門發運判官	
52	殿中丞		史館檢討				
		群牧判官			太子贊善大夫		
		通判鄆州 并州			殿中丞	知州齊州 秦州	
57	太常博士				國子博士		
	祠部員外郎	判吏部南曹	直祕閣		虞部員外郎		
59	度支員外郎	開封推官			比部員外郎		
62	起居舍人	同知諫院	天章閣待制		駕部員外郎		
		判流內銓	龍圖閣直學士		主客郎中	提點刑獄	
67	右諫議大夫	御史中丞			金部郎中	轉運使 淮南 陝西 河北 河東	
			翰林學士 兼侍讀學士		衛尉少卿		
70		知審官院	端明殿學士			致仕75歿年87 (范文正公集卷11)	
	(以	知永興軍 下略)					

とが知られる。唐代の科擧は文字通りいろいろな科目の選舉で、少くとも進士科と諸科の差はそれほど大きくはなかった。それが宋に入ると、成程形の上では進士も諸科もひとまとめに試験や發表が行なわれこそすれ、實際の任官において、雲泥のひらきが出て來るのである。王安石が科擧制の改革にあたり、明經諸科を廢止したのは、こうした底流をふまえての措置であつたと言つて差支えなからう。<sup>(53)</sup>

### 三 館職と臺諫

朝官の最上級まで來ると形の上からは寄祿階はスキリするが、遷官する時の條件は逆に複雑になる。それは、寄祿官と次元を異にした幾つかの要素が導入され、その組合せが何通りにも分れるために他ならない。その要素は、館職、臺諫、そして差遣（實序）などであるが、この章では前二者の概略を述べる。

#### (1) 館職 その一

經學、史學に通曉し、詩文に巧みな人材を側近に屬從させ、國策決定に參與させるという發想は、漢唐いずれの皇帝にもみられ、唐太宗の十八學士は後世に喧傳される。官僚制度が飛躍的に發達した宋代には、こうした天子の知的サロンが、館職と總稱される一つの體系にまとめあげられたのである。それは原則として寄祿官や差遣とは別の附加的な稱號であり、第一に、德行と才能のほかに文學的素養を持つて皇帝の顧問となること、第二に王立アカデミーの所藏書物や文化財の整備と充實、とりわけ書物の複寫や校勘、あるいは歴史資料の編纂にあたる任務を與えられる立前であつた。この館職を持つことは出世コースのシンボルマークにも相當し、士大夫官僚たちはその入手に躍起となつた。その制度が安定した仁宗

時代、

館閣の職は、育材の地と喧傳される。現在大臣クラスの補充には必ず翰林學士クラスがあてられ、翰林學士の後釜は必ず館閣から充當される。館閣は大臣養成の場である。

と歐陽脩が述べているのはその間の事情を物語る。

さて、一口に館職といっても、その種類は雑多で、それぞれが独自の沿革を持っている。それらが、例によってうまく一本化されているわけだが、宋の館職を正確に把握するためにはやはり一つ一つの分析からとりかからねばなるまい。

宋の館職もしくは館閣の職とは、某々館某々閣時には某々院と名づけられる何種類かの宮中御文庫、王立圖書館などの官職である。

館職、館閣はどちらもそれらの總稱だが時として兩者の間に微妙な差がみられる。<sup>(5)</sup>すなわち館職と呼ばれる時は、特別試験に合格した京朝官に與えられる下級のものという意味——實はこれが本來の意味——が含まれるに對し、館閣の方は、歐陽脩の言葉にみられるように、館職中の上級のものの、第八表でいうと學士クラス以上を指すことがあった。元豐の改革までの館職の一覽表は第八表の通りであるが、待制と直某々館の間で一線が引かれる。以下順次説明を加える。

第八表 元豐以前館職略表

	名					稱		
殿學士  講筵 閣學士 雜學士  待制	昭文館大學士					集賢殿大學士	監修國史	
	觀文殿（舊文明殿・紫宸殿）大學士					觀文殿學士		
	資政殿大學士					資政殿學士		
	端明殿學士							
	翰林侍讀學士					翰林侍講學士	〔崇政殿說書〕	
	龍圖閣學士					天章閣學士	寶文閣學士	
	樞密直學士							
	龍圖閣直學士					天章閣直學士	寶文閣直學士	
	龍圖閣待制					天章閣待制	寶文閣待制	（以上侍從）
下級 館職	直龍圖閣	昭文館	史館	集賢院	祕閣	崇文院		
		直昭文館	修撰 直史館	修撰 直集賢院 校理	直祕閣 校理			
		檢討						
準館職	館編 閣校 校書 勘籍							

歴史をことのほか尊重する中國のこと、まして統一王朝ともなれば、文化の樞府を誇示する宮廷圖書館や史料編纂所は不可欠である。それらを統轄する官署が唐では秘書省だった。ところが宋に入ると、この官署は形の上では消滅し、その構成員であった、校書郎、秘書郎、著作佐郎、著作郎、秘書丞は、前章で明らかなようにすべて寄祿官の系列に組み込まれてしまった。しかし、宮中文化センターの役割と職務は、宋政權の安定とともに増大する一方である。

太宗の時代、唐の傳統を承けて、昭文館、集賢院、史館の三館を建て、その全體を崇文院と稱し、これに秘閣を加えて、三館秘閣と呼ぶ王立圖書館の組織が固められた<sup>(56)</sup>。この三館秘閣と崇文院に、大學士、直學士、修撰、直(某館閣)、校理、檢討、校勘といったポストが設けられる。ただこの職階が全館閣にあるわけではなく、また修撰以上と以下はその性格も異なる。後者について言えば昭文館大學士、集賢殿大學士などはすべて現役宰相の榮譽稱號であり、しかも、その時々宰相の數と宰相の中の序列がこれでわかる仕掛けになっている<sup>(57)</sup>。こうした特殊な館職は省き、ここでは直館閣以下に目を向けよう。

三館秘閣の館職は名稱こそ違うが、職務はほぼ同じだと言われるように、本來は差遣、つまり實務を伴う館職である點に特色があった<sup>(58)</sup>。その性格は下へ行くほど強く、校勘とか、普通は館職扱いにされぬ編校書籍官あたになると、書物を毎日いじるライブラリアンそのものになる。直館閣以下の下級館職は、將來の出世が豫約される反面、給料が安い<sup>(59)</sup>。王安石が文彥博らの推輓によって、たびたび受験の命をうけ、集賢校理の職を與えられようとしたにも拘わらず、固辭し續けた話<sup>(60)</sup>もそれと關係する。これは裏がえせば、都に住む有力者や金持の子弟で、食べるに困らぬ者にとってはあつらえ向きのポストということであり、次に述べるように、獵官運動の弊源ともなる場合もあった。

館職を手に入れるには大凡三つの方法があった。これも歐陽脩の言葉を借りて列舉しよう<sup>(61)</sup>。

第一、進士の上位五人と制科(既に任官している優秀者を對象とした特別試験)の及第者が、幕職州縣官や知縣の差遣を一任期(四



第九表 北宋館閣考試略表

官	職	直史館	直集賢院	史館檢討	集賢校理	祕閣校理	館閣校勘
(選)	(人)						4
簿郎	主簿郎						1
郎事	監書禮	2	5		1		7
丞丞	評寺監		7		3	2	4
丞丞	理祿作		1		1	1	1
郎郎	理寺佐		1		5	3	6
	書書		3		5		
	作書				1		
贊太	善子		2	1	2		
殿祕	大中	3		1	5	5	1
太太	中書	3	2		6	5	
	常博				1	1	
	常	2	1		8	9	
員郎	外郎	2	5		9	4	
		1			1		

・五位は二任期、勤めあげた時、試験して與える。第二、參知政事、樞密使などの最高官僚が拜命の時、二、三人の人材を推薦し、それを試験する。第三、難治と呼ばれる統治が六ヶ敷い州縣や重要な州縣の地方官に權威を持たせるために與える場合——これを貼職<sup>⑧</sup>という——。

第一の場合は、制度の趣旨も實際の人物から考えても、妥當な線が出るが多かつたろうし、第三の場合も、一應の客觀的評價がつけられたと思われるが、第二が問題である。

宋會要選舉の館職考試には、國初から元豐改革までの合格者を列記している。下級館職についた者すべてが網羅されているわけではなからうが、念のためここに載せられた百四十例あまりを選んで表に直すと次のようになる。一見して明らかのように、下は選人から上は郎中に至るまで、京朝官の寄祿

階の殆んどどのランクから合格者が出ていことが知られる。因みに、ここに見られぬ主な寄祿階は、前章で問題とした衛尉寺丞や太子中舍などの無出身者のみを通るものか、著作郎であり、上述の各寄祿官の意味づけを消極的に補強してくれるだろう。

ところで實例を検討して行くと、壓倒的に多いのは宰相をはじめとする有力者の推薦の結果、試験というケースで、ほかに人の目につく上奏を行ったとか、何らかの著述によって認められたといったケースが混っている。

有力者の推輓は、晏殊の范仲淹、王曉の歐陽脩と尹洙のように、<sup>(64)</sup> 妥當な場合も少くないが、より多く、有力者の子弟との個人的關係を優先させ勝ちになるであろう。果して慶曆三年（一〇四三）諫官歐陽脩は、金持の子弟が有力者の推薦狀を求めて奔走し、そのためにひどい時には他人の詩文を剽竊したり、金をばらまきのりと缺の書物を作らせたりすると述べ、<sup>(65)</sup> 本來館閣にあるべからざる貴家の子弟として呂公綽と錢延年を名指して攻撃した。呂公綽は飛ぶ鳥を落す勢いの官僚派宰相呂夷簡の長子であり、錢延年また太宗朝の名臣錢若水の一子にほかならぬ。歐陽脩の指摘のすべてが客觀性を持つかどうかはともかく、大勢として有力者の門に館職希望者が殺到したことは否定できず、<sup>(66)</sup> 政府側も館職の人數制限をしたりして、榮譽の維持を計った。<sup>(67)</sup>

さて、下級館職の試験は、翰林學士院か中書舍人院で實施されるが、<sup>(68)</sup> その時期はまちまちであるから、必要に応じて行なわれたと思われる。

試験の内容は、北宋の前半、神宗時代までは詩と賦一題づつがきまりで、治平三年（一〇六六）、詩賦を長らくやりつけぬからとて論文二題に代えてもらった蘇軾（東坡）などは例外に屬する。王安石の改革を待つまでもなく、實際政治から游離しがちな詩賦を科擧から削減しようという趨勢は館職試にも及び、治平四年閏三月の吳申の提言を皮切りにして、翌熙寧元年八月以後は策と論にきりかえられてしまった。<sup>(69)</sup> 答案の評價は、最初は優、稍優、堪、稍堪、平、堪次、次低の七段階でつけられた。實例であたると、例えば天禧元年の學士院試で、光祿寺丞の王舉正は賦稍優、詩平、大理寺丞の丁度<sup>(70)</sup>は賦詩とも稍優でそれぞれ館閣校勘と直集賢院を與えられている。<sup>(71)</sup> のちにこの評價は基準が曖昧であるという聲が起り、一、文理俱高、二、文理俱通、三、文理粗通又は文粗理通、四、文理俱粗、五、紕繆、とし、三と四をさらに上下に分ける七階評價にかえられた。宋會要でも皇祐元年（一〇四九）以後はそれに從っている。<sup>(72)</sup> ただ成績は四の下とか五でない限りそれほど重要ではなく、推薦者の顔や、本人のその時の位階の方が館職名に影響したと考えられる。

下級館職の受験資格は選人から郎中まで、つまり文官なら誰でも良いことになるが、任用されるポストは、直館閣は朝官、校理と檢討は京朝官、校勘は選人から京朝官と一應きめられていた。<sup>(73)</sup>ただ第九表でみると直館閣でも直史館はほぼ規定にあたるが直集賢院は京朝官兩方にまたがり、直秘閣は全くなく、校理や檢討も限定された館閣にしか置かれていなかったことが知られる。こうした館職についた將來性あるエリートは、館閣の實務につくのだが、場合によっては職名をつけたまま地方官に赴任してしまうことがあり、次第にその傾向が強くなる。そうになると、或る程度は必要な、館閣の實務に携わる人間が減少し、その補充として、編校書籍官、略して編校と呼ぶ最下級のポストが作られる。編校には試験がなく、わざと資格の浅い新進が登用されたが、二年で校勘、四年で校理となり、校理一年で他の差遣に出るというルートがひらかれた。<sup>(74)</sup>

一旦館職についた者がどのように職階をあげるかは、編校の例が参考になるうが、實はあまり明確な規定はなかったらしい。極く大雑把にみると、校勘から四年で校理にのぼったあと、秘閣校理は直秘閣、集賢校理は直集賢院又は直龍圖閣、最初から直史館であれば次は直昭文館になるといったところで、直秘閣から龍圖閣待制、龍圖閣直學士に進むのは異數の恩典と言われている。<sup>(75)</sup>館職内部の昇進の實例としては司馬光が適當であろう。彼は文字通りの後楯だった副宰相龐籍の推薦で、慶曆八年十一月(一〇四八)、大理寺丞からテストを受け、賦も詩も三下、つまり七等の眞中という冴えない成績で館閣校勘になる。<sup>(76)</sup>そして同時に同知太常禮院という、凡そ實務とは縁の薄い差遣も與えられる。この限りでは館閣校勘は帶職

——別の中央官の差遣を持ち館職を帯びる——とみなせるが、同知太常禮院は閑職であるから、館職の方の實務もできる仕組みになっている。司馬光は館閣校勘を授けられた時、二年のち校理にするという約束をも貰った。これが守られたかどうかは定かでないが、四年後の皇祐四年(一〇五二)に史館檢討、それから五年して直秘閣さらに五年で天章閣待制、次に三年たった英宗の治平二年(一〇六五)には龍圖閣直學士に達する。この間、史館檢討の時期には王安石とともに馬政を

扱う群牧判官、パトロン龐籍の辟召により鄆州と并州の通判（副知事）の差遣を経験しているから、館職は、帶職あるいは貼職となり、名譽の他に若干の特別手當のよりどころとなったにすぎない。

以上、もともと王立圖書館のライブラリアンに淵源する下級館職の輪廓が明らかになったであろう。この館職は、それだけでは甚だ心もとないもので、殆んどの場合内外の差遣をあわせ持つ帶職か貼職扱いにされた。直館閣以下の館職が、待制以上と明確に區別されていたことは、試験があった他に、合班——総合官員序列——の中に加えられていない點からもうかがえる。

最後に寄祿官とこの下級館職のかかわりに論及しよう。宋史職官志によると、無出身の諸寺監主簿から殿中丞に至る京朝官敍遷の規定には少數の例外を除き、館職を帶びる場合は有出身に同じという注記がつけられている。進士出身者は寄祿遷官に於て極めて有利に取扱われているから、この段階ではたとえ彼らが館職を帶びても別扱いせず、むしろ上に行くほど昇進の可能性が薄い無出身者だけに優遇規定が設けられていたと解釋しておきたい。

## (2) 館職 その二

引續いて上級の館職にもふれることにしたい。直館閣の上には修撰、殿撰、待制、雜學士、閣學士、殿學士とならぶが、その沿革や性格はまちまちである。館職もここまで來ると相當なもので、試験などではなく、専らその人物と周圍の情況を勘案して任命される。

最初の修撰と殿撰つまり史館修撰と集賢殿修撰は、少し特殊な官位である。すなわち、三館の系列に入る國史や實錄などの、國家的な歴史書編纂の際、その最高責任者に與えられる場合が多い。新唐書の撰者である歐陽脩と宋祁は、龍圖閣學士という高級館職を帶びる上に、前者は史館修撰、後者は集賢殿修撰の職を加えられている。冒頭にあげた司馬光の官

職名の②にも集賢殿修撰の名が見えるのは、彼が洛陽で勅命によって資治通鑑の編纂に従っていたためにほかならない。北宋も末近くなると、館職の大安賣りがはじまり、帶職や貼職をしない者の方が少い状態になる。この頃には、集賢殿修撰とか集賢殿修撰を改めた右文殿修撰、秘閣修撰などが多數登場するが、これらと元豐までの修撰を同一視はできない。

上級官職の中で、元豐まで最も頻出するのは、待制と直學士クラスである。宋では待制以上の職を持つ者を侍従として扱う。侍従は、言葉そのものは天子の側らに侍り従う者で、現今の側近に當るうが、この時期には、左右諫議大夫と中書舍人、給事中以上の寄祿官を持つ者に限定して使われていた。しかしこの待制の職を帯びておれば、侍従同等と見做されるのである。<sup>(19)</sup>

待制以上の三ランクは、宋に入ってから新しく作られた館職名で占められる。待制や學士の頭に龍圖閣、天章閣、寶文閣などの閣名を冠せるものがここに並ぶ。これら諸閣はいずれも、宋の皇帝たちの御製の詩文や、彼らが愛玩した書畫と寶物、それに書籍を納めておく寶藏庫だった。<sup>(20)</sup> 龍圖閣は眞宗の初め太宗のため、天章閣は仁宗天禧四年（二〇二〇）眞宗のため、<sup>(21)</sup> 寶文閣は仁宗沒年の嘉祐八年（二〇六三）彼のためにそれぞれ建てられた。<sup>(22)</sup> なお神宗以後、南宋に至るまで、重だった皇帝のために閣が建てられ館職が置かれている。宋の職官關係の史料では、これらの諸閣すべてに、待制、直學士、學士をならべるが、現實には、任用される職とそうでないものの差がかなりある。最初にできた龍圖閣の館職を帯びる者が一番多く、ここには直龍圖閣という待制以下のポストまで設けられた。北宋中期のさしずめ大岡越前にもあたる剛直の包拯<sup>(23)</sup>、のちの小説や戯曲で、包龍圖と呼びならわされるのは彼が龍圖閣直學士を帯びていたためである。これに反し、天章閣は、待制は同じく包拯もなっているが、<sup>(24)</sup> 學士は慶曆七年（二〇四七）の王贊一人だけで、その理由は「稱呼非便」と書かれている。<sup>(25)</sup> 宋代の掌故を書きとどめた隨筆や雜記には、龍圖閣以下の學士や待制が何時、誰から始まったかについて記述するものがかなり多いが、いまは一切省略する。

三閣の直學士の上位にくる樞密直學士、略して密直と呼ぶ館職は一風變っている。周知のように、樞密院は五代に入り、軍政の最高官廳となつて宋に繼承される。五代後唐の時代、その長官樞密使に任命された安重誨は文學的素養がなく、天子の明宗も大同小異で、上奏されて来る文書をうまくさばけない。そこで然るべき文官を端明殿學士などに任じてことに當らせた。その一つが樞密直學士というわけである。宋になると、樞密直學士の必要性は消滅したにもかかわらずその名稱は残つて館職に加えられた。とりわけ元豐以後では、樞密直學士は吏部を除く五部の尙書が、外任（主として第一級の府州の知事）にまわされる時に與えられる慣例となる。<sup>86</sup>

諸閣の館職の最上級は龍圖閣學士あたりだが、これを持つような者は、必ずといってよいくらい正史の列傳に記載される有名人である。この上には、翰林の二字をつけた侍講學士と侍讀學士が来る。これらは、やや位階の低い者に與えられる崇政殿説書とともに、一括して經筵官と言われる。宋の皇帝は、表面だけではなく、實際に春と秋、定期的に宮中邇英閣において經書を読み、諸問題について進講を受けた。その講官たちが彼らである。従つてこの館職は、單なる飾りというだけではすまない。事實、翰林侍講學士には注疏の専門家刑昺の顔などもみえるし、司馬光の肩書きの②にも翰林侍讀學士が入っている。なお元豐の改革で、この館職はやめられて兼侍講、兼侍讀と變つてしまふが、それも侍從以上の高級官僚に與えられたにとどまる。<sup>87</sup>

さて、端明殿學士以上の職は、翰林學士以上宰相に至るまでの、現任乃至過去にそのポストにあった高官を表わすために使われる。

端明殿は、西京洛陽の最も重要な官殿だが、その名をつけた學士が創置された経緯は上記の通りである。<sup>88</sup> 五代の端明殿學士は樞密使、つまり宰相格の者と比肩するポストであつたが、宋になると、この系列は文明殿學士から紫宸殿學士、さらに觀文殿學士へと變遷してゆく。そしてこの系列とは全く別に、仁宗の明道二年（一〇三三）翰林學士を勤めた者に改め

て端明殿學士を與えることが始まった。司馬光も翰林學士を經驗しているから、②では最初に端明殿學士の稱號を高らかにかけることになる。<sup>(91)</sup>但しこれも、元豐以後は安賣りが行われ、宋末以後は延康殿學士と改稱されてしまった。<sup>(92)</sup>

次の資政殿學士と大學士は眞宗を動かす南人勢力の代表の一人王欽若が、副宰相と宰相をやめた時に特に設けられた館職で、大學士はわけでも優遇の意がこめられ、仁宗末年、學士に定員が決められるまでは、向敏中、李迪、王曾の元宰相と宋祁の五人を數えるにすぎない。<sup>(93)</sup>

最後の觀文殿學士と大學士は館職の最高位といえよう。觀文殿は實は隋の煬帝の宮殿名で、それかあらぬか、宋初では、副宰相經驗者に上記文明殿學士が授けられていた。やがて眞宗の諡號の文明の二字を避け、紫宸殿と改め、それも具合が悪いから觀文殿に代えられた経緯を持つ。觀文殿大學士は皇祐元年（一〇四九）の賈昌朝に始まり、以後元宰相に與えられることが常例化した。<sup>(94)</sup>なお、はじめにふれた通り、昭文館大學士と集賢殿大學士は、現職宰相にだけ加えられる。本來、これは觀文殿のあとに置くべきかもしれぬが、この二つは合班にも入っていないから、その特殊性を指摘するにとどめる。

元豐の官制改革は、館職の上にも大きな變化をもたらした。上級の館職に關しては、行論中そのいくばくかにふれたが、下級館職の分野で變化は特に著しい。すなわち、有名無實であった秘書省が復活し、上は秘書監以下、下は校書郎、正字に至るまで、寄祿官がアットという間に職事官に戻ってしまう。そこで三館秘閣の直館閣、校理、校勘が不要になり、貼職用の直秘閣一職を除き、全部廢止される破目に陥った。すでに寄祿階が改められている以上、これら下級官職が存在意義を失ったことは明らかであり、下級館職は元豐改革の合理化、簡素化の波をもろにかぶったと言えよう。ところが、元祐はじめ、舊法黨が政權をにぎるとまたも下級館職があらわれる。以後、朋黨の波にもまれつつ、新しい職名をもつけ加え、體系的に説明にくい複雑な變遷が展開されることになる。その解説はまた別の機會にゆずりたい。<sup>(95)</sup>

### (3) 臺諫官

殿中丞や秘書丞の寄祿階に達した官員に對し、太常、國子博士に進むかわりに、天子の特旨<sup>11</sup>特別發令という形で臺諫官というグループが用意されている。臺諫、つまり御史臺官と諫官は、全體からみると必ずしも高い地位ではないが、宋代の政治舞臺では、青年將校の舌と筆の冴えを示す、華々しい役どころであつた。今に残る奏議類の中に、いかに臺諫たちの手になるものが多いかは、誰しも氣付くところであろう。臺官と諫官の職務は截然と分けられるべきだが、元豐の改革までは、いわばセットとして寄祿官のある段階に巧妙に嵌め込まれていたのである。すなわち京朝官で館職を経験したエリートの多くは、太常博士から員外郎というコースを進むのではなく、特旨によって臺諫の昇進過程をふみ、その後、上級の員外郎か郎中に遷るのが常道とされた。制度的には寄祿と差遣を關係づけ、また、地方の實際政治と館職を経験して來た高級官僚の卵たちに、現在の議會の論戰にも似て、宰相や執政らの政權擔當者と渡り合わせるといふ、美事な機構がここに看取されよう。では兩者はどんな内容を持っていたのだろうか。

秦漢以來の傳統をふまえ、御史臺官が綱紀の肅正と官員の糾察、彈劾を受持つたことは宋とて同様である。少くとも宋初には御史大夫は置かれず、御史中丞が臺長の任についた。

唐制では御史中丞は正四品官だったから、宋は、特別にそれに見合う、右諫議大夫の寄祿官を與えるが、そんなに高位階の者が御史中丞になるとは限らない。従つて、御史大夫は、右諫議大夫權御史中丞と權の一字を加え、同時に兼理檢使とするのが通例であつた。<sup>(97)</sup>司馬光の官職の①はそれにピッタリ符合する。御史中丞の下に秦の張蒼に淵源を求められる由緒ある侍御史知雜事が來るが、これは副臺長にあたる。次が三國の魏に始まる殿中侍御史二人で、儀法をもつて百官を糾察する<sup>(98)</sup>と稱せられるように、朝會をはじめとした公的儀禮の際に、儀制を守れぬ官員を彈劾する任務を負う。殿中侍



御史の下に尙書六部を分擔監察する建前から六人の監察御史が置かれ六察と略稱される。なお、低い寄祿階から殿中又は監察御史に拔擢された者は下に裏行(見習い)の二字をつける。侍御史、殿中、監察御史の部局を侍院、殿院、察院と呼び、合わせて三院という<sup>(98)</sup>。臺官は御史中丞を除き、監察御史、殿中侍御史、侍御史の順に昇進し、同時に、それが員外郎の遷官と並列される。従って侍御史は、後述する前行員外郎の標準コース、左曹の司封員外郎に轉官することになる(第十表参照)。

一方諫官は彈劾糾察は行なわず、諫諍、つまり、國政の諸問題につき、皇帝をいさめあらそう、實際は宰相大臣と論争するのが職務であった。諫官は沿革的には、漢にはじまる左右諫議大夫、唐の則天武后時代に設けられた左右拾遺と左右補闕が正統であろう。この場合、左は門下省、右は中書省に屬する建前であった<sup>(99)</sup>。然るに宋に入ると、諫官の代名詞ともいふべき諫議大夫が、侍從のボーダーラインをあらわす重要な寄祿官に變貌してしまう。さらに、左右拾遺と左右補闕も、太宗の端拱元年(九八八)、それぞれ左右司諫と左右正言に改められるが、これに往古の左史・右史の流れをくみ、やはり門下と中書に分屬する起居郎と起居舍人が加わって全く新しい諫官體系が作りあげられた。この諫官の系列は、先の臺官の系列と雁行するが、實質に若干の違いがある。臺官は館職を帯びることが原則としてできなかったのに對し、諫官は帶職が許される。それが待制以上の職の時は、表のように一官をとばして昇進できた(二六八頁)。若し左正言で龍圖閣待制を與えられれば、司諫をとばして起居舍人にゆき、次は前行郎中を越えて一擧に禮部郎中に進む。禮部郎中は二十四ある郎中の中でも左名曹に屬するエリートポストで、大變なスピード出世といえる。

なお念のため申し添えると、元豐までは諫官のため諫院と呼ぶ官署が設置されていた。その事務職の長官は諫官が兼務したが、時には他のポストの者が兼領する場合もある。この時は特に知諫院という名稱を與えるが、知諫院は諫官本來の職務には關係しない<sup>(100)</sup>。

北宋の臺諫官の責務については、仁宗天禧三年(一〇二九)の勅令が基本線といえよう<sup>(101)</sup>。それによれば、諫官と御史の人

數は各六人<sup>(103)</sup>で、他の職務を兼ねることはできず、毎日一人が定期的の上奏を行い、急務があれば隨時上奏ができた。一旦このポストにつくと三年間は差出を許されないが、その間不適任と認められれば直ちに罷免させられました。こうして臺諫官は清要の選の一角に加えられ<sup>(104)</sup>、館職と同じく、この道を通っていないと士大夫社會で肩味の狭い思いをしなければならなかったと考えられる。臺諫體制が定着した眞宗以降、『皇宋十朝綱要』が、宰相や翰林學士とならべて、臺諫官の名を列記しているのもその間の事情を裏書きするであろう。

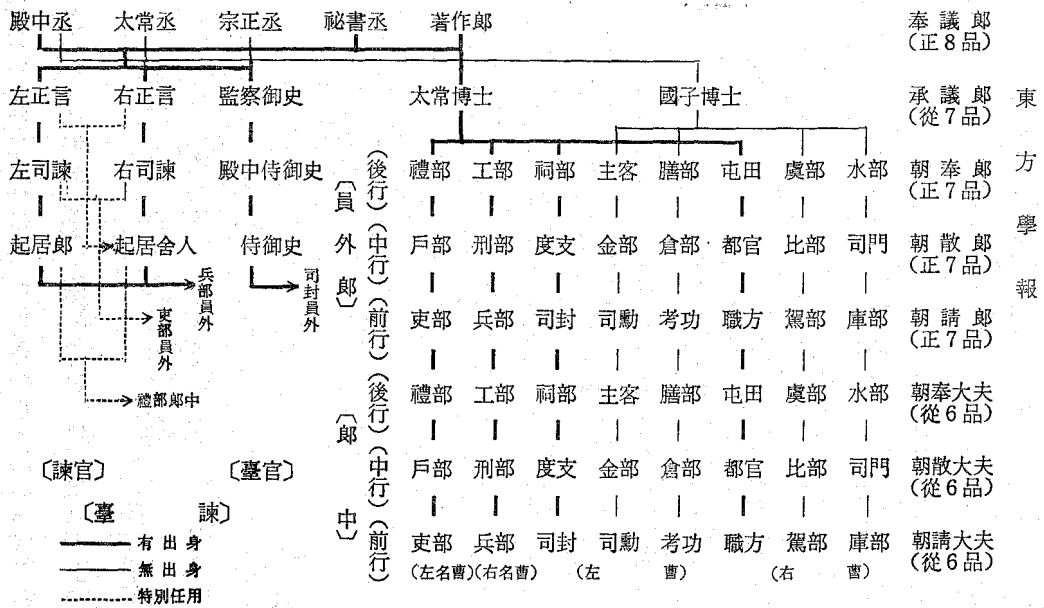
#### 四 寄祿官の敘遷 その二

少し回り道をしたが、再び寄祿官の敘遷に戻ろう。太常、國子博士以上の遷官は一見多岐に分れる。しかしよく注意すると、その裏に合理的なルールが潜んでいることを發見できる。まず、唐代、行政の中核をなした尙書省二十四司の員外郎と郎中、合計四十八の官名が用意されている。この寄祿階の妙味は二十四司の組合せ方にある。縦からみると右曹、左曹、右名曹、左名曹と分けられ、横にはそれらが、後行、中行、前行——要するに式典の行列順——とならび、それがそのまま位階の上下と出自を示すよう仕組まれている。員外郎のランクまで來た者は、どれか一系列の後、中、前行、同じく三段階の郎中を遷官して行くことになるが、どの系列を通るかは、その人の經歷や現在の狀態と深く結びついているわけなのである。そのあらましを次に書きつらねよう。

二十四司で最も低い、右曹の水部—司門—庫部の系列は、無出身の雜流（主に胥吏）出身者が國子博士の次につけられる寄祿階である。ただ、多くの場合、雜流出身でも、ここまで來るぐらいの者は、もう一段上の左曹の膳部—倉部—考功の線<sup>(105)</sup>をとり、水部系には職賄罪などによって一旦降等された者がつけられたと思われる<sup>(106)</sup>。水部系と並行する膳部系は、同じ

第十表 臺諫官・員外郎・郎中敘遷略表

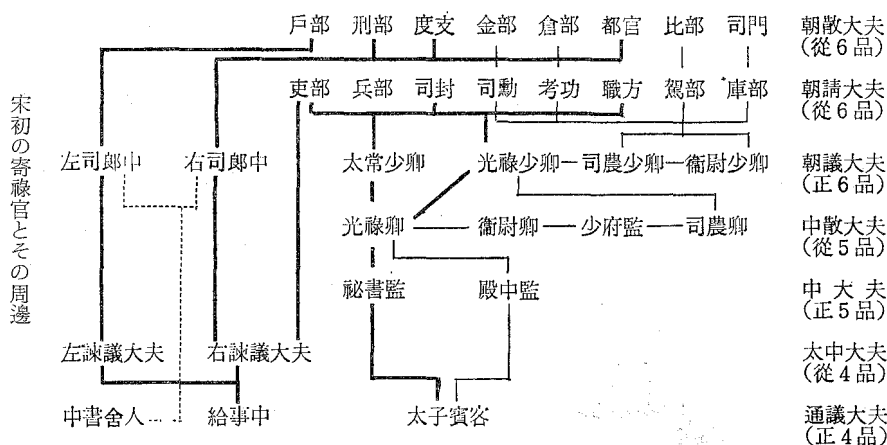
〔元豐寄祿格〕



く無出身雜流用でも、中央三司（大藏省）の推官や判官、路の提點刑獄など、陽のあたる差遣を経て來た者に與えられる。<sup>(107)</sup> 右曹の中位、虞部―比部―駕部の線は、恩蔭出身者が普通に進む位階であり、雜流と同じく、良い差遣を経験した者は、左曹の主客―金部―司勳にあてられる。<sup>(108)</sup> 進士出身者が廣く任ぜられ、從つて列傳などで最もポピュラーな系列は右曹上位の屯田―都官―職方の系列と、左曹の祠部―度支―司封である。後者は館職を持ったことのある者が任用され、これまでの例で言えば、司馬光、王安石はいずれもこの系列を辿っている。<sup>(109)</sup> 左右の名曹となるといっそう條件がつけ加わり、兵―刑―工の系列は館職でしかも轉運副使以上の差遣を持つ者、吏―戸―禮は侍從官、現實には待制以上であることを要求された。<sup>(110)</sup>

員外郎と郎中の寄祿階は、縦の系列を單位に轉官して行くのが普通（常調）であるが、系列の途中で、館職や差遣の恩典を與えられることも少くない。その時は、右曹は左曹、左曹は右曹にリンク横すべりする。例えば恩蔭系の比部員外郎が提點刑獄以上のポストに任命された時、彼は左曹の恩蔭系列の司勳員外郎に遷されることになる。<sup>(111)</sup> むろんこれらはすべて原則で、實際にはさまざま

第十一表 郎中以上敘遷略表



まな例外が起る。王曾は狀元及第にも拘わらず、汾陰で行われた后土祭祀の恩典として主客郎中を貰い、北宋の名地方官として數々の逸話を残す張詠(乖崖)は、太常博士で轉運使の差遣を持っていきなり虞部郎中に超遷しているなどはその一例にすぎない。<sup>(113)</sup>

さらに目をひくのは、待制の職の有無が、郎中の段階で歴然と昇進に影響して來ることである。

狀元出身者は、將作監丞から二度遷官して左司諫となり、規定ならば起居舍人から兵部員外郎と進むはずだが、大底は司諫か起居舍人で待制を貰う。前者なら、吏部員外郎から戸部郎中、そして左司郎中、後者では、禮部と吏部の郎中から右諫議大夫というように、一段階を抜いて(隔資)特別昇進する。<sup>(114)</sup> このルートは、郎中の次に置かれている長い卿監寄祿を横目でみて、瞬く間に諫議大夫以上の線——つまり本來の侍從——に到達するまさに新幹線である。待制以上の館職を侍從と呼ぶことが一般化している理由も、これで了解されよう。

郎中の上にはごてごとした卿監の位階がならぶ。これは少の字がつく少卿監と、何もつかぬ大卿監に大別された上、その中で細分されるが、ここでは縦に寄祿階が遷轉するほか、同列を横にも動くから厄介である。進士出身で常調の場合、右曹の職方郎中は光祿少卿に上り、光祿卿、秘書監へ、左曹の司封郎中は太常少卿から、光祿卿、秘書監と三段階を通過しなければならぬ。これに對し無出身の恩蔭は、郎中のあと、衛尉或は司農少卿、ついで司農卿、少府監、

衛尉卿をへて漸く殿中監に辿りつく。無出身者が、現役中に常調を一步一步こまであがって來ることは、年令から考えても不可能に近い。少くとも少卿監にまで來れば、館職か何かの急行券を手に入れられるのが普通で、それかあらぬか、元豐の改革の時には、殿中監はいなかったと記録されているのである。<sup>(15)</sup>

次に卿監を通らぬ高級官僚コースいければ主流寄祿階に目を轉じよう。左右名曹の郎中や各曹中行郎中から隔資で遷官した待制の館職を持つエリートコースは幾つかに分れる。たとえば戸部郎中のみ左司郎中に、他は右司郎中に進む。<sup>(16)</sup>

これはそのまま、左右諫議大夫に上り次で給事中に一本化される。ところが、左右司郎中で翰林學士にいた場合には、諫議をとばして中書舍人となる。もともとの格から言くと、給舍とよびならわすように、中書省の舍人より、門下省の給事中の方が上位だが、北宋の寄祿階では、中書舍人は稀にしか與えられぬ榮譽ある位階で、ここからは隔資で禮部侍郎にとぶ。三乃至四年の一定年限で磨勘轉官が行なわれる——現代語でいえば定期昇給——ことは左右諫議で終る。ここまで來れば差遣も人事院總裁や大藏大臣、副宰相級になっているので、侍郎以上は、宰相、大臣クラスの特殊寄祿官と言ってよろしかろう。

それに入る前に、二つばかり残しておいた問題がある。

その一つは差遣と寄祿の絡み合いである。臺諫と館職を除いて、本來の寄祿官はすべて實際職務を伴なわぬ稱號にすぎない。實際の職務——差遣は差遣で別の體系を形成している。それは資序と總稱され、大雜把にいうと、幕職州縣官、知縣、通判、知州、提點刑獄、轉運使とならび、中央へ戻れば、三司判官、三司使、參知政事、同中書門下平章事とつらなる。<sup>(17)</sup>宋代官制用語として「得資」「資格」など資の字が使われる場合は、まずこの差遣の資序を念頭におく必要がある。

資序の大筋はこれであっても、下級通判は上級知縣より下であり、一旦中央に戻っても再び轉運使に出たり、中央の諸官がこの資序のどこに位置づけられるか等々簡單には説明できない厄介な問題を含んでいる。現實には、人事に通曉した銓

選關係の胥吏たちが、法規と事例と首っぴきでことを運んだらうから、職官志類に詳しい記事がないのも仕方あるまい。それはともかく、寄祿官の叙遷に際し、二回、差遣がかかりを持つてくる。

その一つは、大理評事と大理寺丞の京官寄祿階で無出身者が遷官する時に適用される規定に關係する。職官志では、

審刑院の詳議官、刑部の詳覆官、詳斷官、檢法官、法直官は光祿寺丞に轉ずる<sup>(119)</sup>（大理評事）、それに中書堂後官を加えた者は太子右贊大夫に轉ずる（大理寺丞）。

と書かれている。これら司法關係者の職務内容は宮崎市定氏の論考にくわしいが、中書の堂後官と合わせて、實務に練達した人間を必要とするポストである。無出身者でそういう人間となると、眞先きに胥吏が浮かんで来る。恐らくこの規定は、胥吏出身が比較的多かったこれら差遣を頭において作られたものと考えられる。

いま一つは先にふれた員外郎と正郎で、右曹と左曹に分かれる際の條件と關係する場合である。職官志は、特別に扱う差遣として、發運使、轉運使とその副使、三司判官、國都開封府の判官と推官——開封以外の三京の推判は幕職官。ちなみに知開封府は待制を帶びる者が就任する——提點刑獄などをあげ、翰林侍讀學士以下の經筵官もここに加える。<sup>(120)</sup>こうした措置は、官制機構が複雑多岐になった宋代、個々の官員をいかに合理的に識別するかという苦心の結果あみ出されたのではないだらうか。

差遣に増して重要なのは、兩制として馴染み深い、皇帝の詔勅起草官と寄祿のかかわりである。一口に詔勅といっても次から次へと公布される勅令から、個人の辭令に至るまで、多種多様に亘る。君主獨裁官僚體制の確立した宋代、詔勅は膨大な量に増加して當然である。勅令なら莊重ですぐれた文章、辭令ならその人物とポストを織りこんだ名文を書く仕事が多々ある。人々の尊崇を集める。

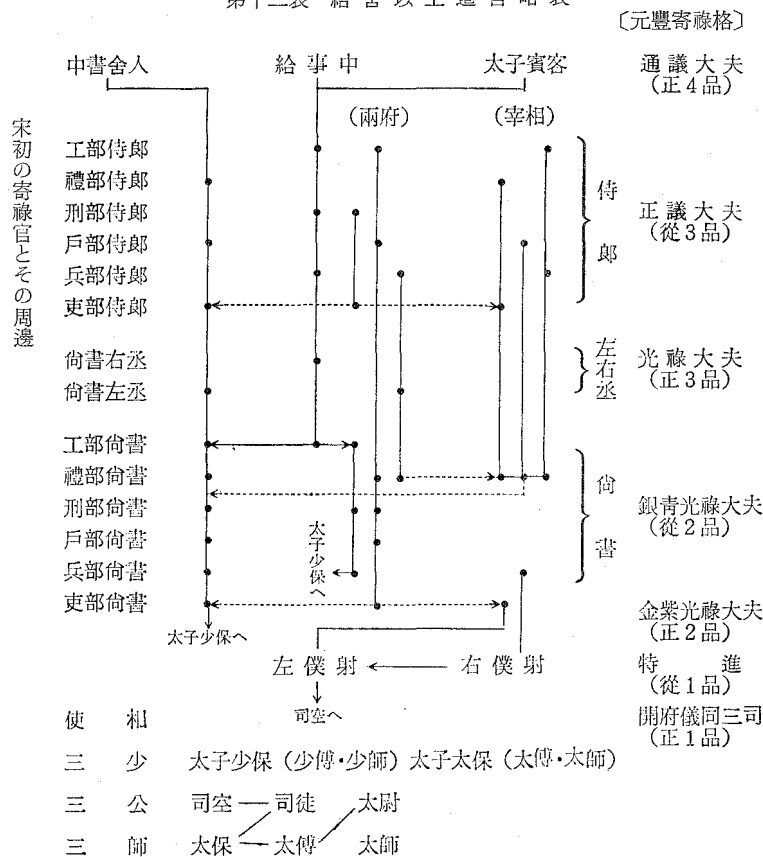
由來、詔勅は、漢代には天子の秘書官たる尚書令が書いていたが、三國の魏に入って中書舍人が置かれ、南北朝時代、

中書の關係する制誥を扱う官として固定する。ところが唐になると、本來は天子の個人的サロンであつた翰林の學士に特に重要な制誥を書かせることが始まり、開元二十六年（七三八）天子じきじきの詔勅を起草する翰林學士が獨立する。<sup>(123)</sup> において制誥は、翰林學士の書く内制と、中書舍人が受持つ外制に二分し、その居場所も學士院と舍人院に分けられる。翰林學士は天子に最も近く、本來の役目である天子の顧問をも兼ねて、清要中の清要にのしあがり、宰相判官と俗稱された中書舍人がこれに準ずることになった。<sup>(124)</sup>

宋に下ると、中書舍人の名は寄祿階になる反面、外制の仕事は増加の一途を辿る。ここで、やはり唐に始まり、本來は、他の官職についていながら、制誥の起草を兼務する者に與えられる「知制誥」の稱號が中書舍人に肩代りする。<sup>(125)</sup>「知制誥」の原意は（皇帝にかわつて）詔勅起草をつかさどることにすぎない。従つて嚴密に言えば宋でも、翰林學士であつて知制誥になる者が内制、他の官で知制誥を勤める者が外制<sup>(126)</sup>のだが、往々、慣行的に翰林學士を内制、知制誥を外制と呼ぶ。資治通鑑の後漢末あたりの司馬光の職名に、翰林學士、知制誥の兩方があらわれるのは一人で兩制をやっていた意味ではない。

知制誥は何よりも文辭に練達していることが要求される。宋初には、知制誥になるために、百字とか二百字とかの制誥作文を、のちの元豐時代でも百五十字の制誥三篇を試験していた。ただこれも絶對的なものではなく、楊億、歐陽脩ら錚々たる文筆家は無試験であつた。<sup>(127)</sup> 制誥の價值は、比較的客觀性に富むから、試験はさして問題にならなかつたであらう。知制誥にはだいたい員外郎クラスが任命されたが、それ以下の者の場合は必ず右正言を兼任させられた。<sup>(128)</sup> 景祐元年（一〇三四）右正言知制誥となつた王曾にその一例を見られる。宋代、出世街道を歩んだ文官の多くはある時期に知制誥を帶し、彼らが作つた外制は、一つにまとめて各自の文集に收録されている。とまれ知制誥は館職とはいちおう異なりはするが、それと表裏する形で、微妙に寄祿官の昇遷に關係していたと言ふことができる。

第十二表 給 舍 以 上 遷 官 略 表



内制翰林學士の方は知制誥よりはるかに格が高い。それは一名を内相ともいい、ひとたびこれに任ぜられると、親類縁者こぞって一佛化生(お釋迦様の生まれかわり)と慶賀する地位であった。<sup>(129)</sup>ここに來ると、宰相の最短コースを意味し、また翰林學士になったことは、宰相の寄祿階の進度に影響を與えるわけである。

最後に六部の侍郎以上の寄祿官について、若干言葉費しておきたい。六曹侍郎と左右丞、さらに六曹尚書は、現職の三司使をはじめ兩府大臣すなわち參知政事と樞密使(簽書樞密院事、知樞密院事、樞密副使)と同中書門下平章事及びそれに準ずる者に與えられる。但しその敘遷の年限や與えられる位階は一定していない。參知政事などの副宰相は、諫議、給舍から、寄祿をあがって來ることが多いが、王安石のように遙か下の工部郎中から右諫議大夫を與えて拔擢されるケースもあった(第七表参照)。王安石は翌年宰相になると禮部侍郎、五年後に宰相を辭任した時には吏部尚書となっているから、表でみる限り十二段階を一氣にのぼりつめたと言えよう。

侍郎以下の敘遷スピードは、このようかなり速く、一段づつ時間をかけてあがることはむしろ少く、とりわけ宰相などは出来るだけ早く禮部尚書から吏部尚書に進むようとりはから



れた。

宰相をしりぞいた者には左右僕射が授けられ、その上には、三少、三公、三師が連ねられている。三少以上を與えられた臣下は開國の功臣趙普と長らく宰相の椅子にあった王旦、呂夷簡、文彥博ら數人にすぎず、<sup>(80)</sup>殆どの官僚には高嶺の花にすぎなかった。

### おわりに

元豐三年に始まる官制の大改革は、何よりもまず、これまで述べた寄祿官の體系を一新したところに特色があった。改革は一言でいえば宋初以來有名無實化していたもう一つの位階系列である散官制度にいぶきを與え、寄祿官の名稱をすべて散官の名稱といれかえ、同時にこれまでの寄祿官を唐のような實職に戻し、唐宋から五代、宋と生まれた新しい實職を廢止した、とまとめられる。たとえば、秘書省校書郎、正字、將作監主簿から成る京官寄祿の最低階は承務郎、左右司諫、殿中侍御史をはじめ、工部、祠部などの員外郎がならぶ後行員外郎の一行は朝奉郎、上にのぼって左右諫議は太中大夫、吏部以外の五尚書は銀青光祿大夫という具合に變る。さらに選人七階に迪功郎から承直郎の名稱を新設し、上下スッキリと一本化した元豐の寄祿階が誕生したのである。

この改革が斷行された時には、王安石はすでに國政を退き、江寧半山に隱棲していたが、官制改革の實質は、彼が熙寧年間に行なった新法の一環をなすものとみて誤まりなからう。

王安石は熟慮して、雄大な構想のもとに制度改革に取り組み、科擧、學校、胥吏と次々に新法の枠に入れて行った。同じような官職の重複、責務の不明確さと非能率さ、年功序列制の採用、それらが因となり果となって冗官冗費と官界の沈滞

を招く。王安石は、青年時代から、誰もが指摘し、誰もが十分に改革できなかった問題に根底から取組もうとしたに違いない。

元豐の改革、つまり官制の合理化は、寄祿官について言うときのような反對を生む。まず、流品の混淆という非難の聲があがった。すでに明らかなように、宋初の寄祿官は、同じランクに幾つかの官名がならび、進士出身と無出身がつく職階がだいたい決められていた。少くとも縦に寄祿官を何段かつみ重ねると、その人の出自は流品がわかる仕掛だった。それが一ランク一寄祿に變ると判別困難になる。最も典型的なのは員外郎で、雜途、恩蔭、進士などを示す縦の八系列が消滅し、後行、中行、前行が朝奉、朝散、朝請の三郎、いいかえれば二十四が僅か三つにまとまってしまった。

聖人は名辭を使って教化を行なう。それが故に、品類を差別し、科目を明らかに區分し、よび名をきちんと定めた。

だから人々は高望みや僥倖の氣持を持つとしなかった。いま、賢と愚が入り混り、清と獨が一つに流れる、天下のもろもろのものを正しく治め扱うことにはならない。<sup>(131)</sup>

という「分」の觀念が反論の拠りどころである。また、合理化のため、遷官の期間が短くなったことも取りあげられている。例えば普通の侍郎は禮——戸——吏または工——刑——兵と三遷で大凡十二年かかって左右丞になった者が、通議大夫から正議大夫、光祿大夫と、二遷八年ですむと指摘される。<sup>(132)</sup>こうした主に舊法黨側から出される異議がある程度とりあげられ、元祐年間、元豐寄祿階の一部が左と右に別れ、徽宗の大觀年間にはさらに幾つかの寄祿階が増設された。

要するに王安石を領袖とする新法派は、改革の一環として官制の改革わけでも寄祿官の合理化を斷行した。そこには、同一位階内での出目に基く差等を表面に出さぬ配慮が秘められていた。吏士合一の新政を採用し、胥吏や年功序列に掎わらず實力ある官員をどんどん登用した王安石にしてみれば、この改革はむしろ當然のことであった。むしろ保守派からは猛烈な反對が起った。ただ反對にもかかわらず、多少の修正のみで、宋の寄祿官制は元豐以後の線が繼承されて行く。大

量の冗官と制度の複雑さを解消し、周禮から六典と流れる官制の大義名分のためには、流品の點などで多少問題があつても、改革が妥當と認められたからに他ならぬ。しかしそれは王安石の考えていた方向とは違い、むしろその意圖は骨抜きにされ、形骸化した制度が残つたと言つてもよからう。

王安石たちによって改められはしたが、本小論で取扱つた北宋初期百二十年間の寄祿官制はそれなりに精度の高い、緻密な構成を持つ優れたものであると思う。その一見した蕪雜さは實は蕪雜ではなく、十一世紀という段階で、世界最高の文化を持っていた民族にふさわしく、極めて合理的な思考に支えられた精緻さであつた。その合理性は現在の我々のいう西洋近代の合理性ではない。それならばむしろ王安石の合理性の方が今の我々に近いかも知れぬ。ともあれ、鎌倉や江戸幕府の官制と宋初のそれをくらべてみるがよい。そこには比較にならぬ文化の差が横たわっているので、その差、つまり十一世紀における中國の文化の厚さということを、我々は社會經濟史の問題をとりあげる時も、今少し念頭におく必要があるだろう。

註

\* 引用原典中、長編は李燾『續資治通鑑長編』、宋會要は徐松『宋會要輯稿』の略。また「」は上の字を訂正、「」は筆者が補つた文字である。

- (1) 宮崎市定「宋代官制序説——宋史職官志をいかに讀むべきか——」(佐伯富編『宋史職官志索引』所收、一九六三、再版一九七四、東洋史研究會)。
- (2) 趙翼『二十二史劄記』、卷二十三、宋遼金三史重修。
- (3) 宋史卷一六一、職官一。其官人受授之別、則有官、有職、有差遣、官以寓祿秩、敘位著、職以待文學之選、而別爲差遣、以治内外之事。
- (4) これについては衣川強「宋代の俸給について」(『東方學報』京都四十

一、一九七〇)を参照。

- (5) 例えば五代會要卷二十一、選舉下などによる。
- (6) 宮崎市定「宋代州縣制度の由來とその特色」(『アジア史研究』第四、一九六四所收)。
- (7) 宮崎注(1)論文、宋史卷一五八、選舉一。石林燕語卷三などを使つて作成。
- (8) 宋史卷一五八、選舉一。
- (9) 宋史卷一五八、選舉一、卷八五〇、地理志。
- (10) 歐陽文忠公文集卷三十四、徂徠石先生墓誌銘。宋史卷四三三、松井秀一「北宋初期官僚の一典型——石介とその系譜を中心に——」(『東洋學報』五一ノ一、一九六八)。

- (11) 王臨川文集卷九十一、司封員外郎秘閣校理丁君墓誌銘。歐陽文忠公文集卷二十五、集賢校理丁君墓表。
- (12) 歐陽文忠公文集卷二十五、隴城縣令贈太常博士呂君墓誌銘。
- (13) 蘇學士文集卷十四、欽州縣令朱君墓誌銘。
- (14) 歐陽文忠公文集卷二十八、大理寺丞狄君墓誌銘。
- (15) 宋史卷一六九、職官九、判司簿尉、有出身兩任四考、無出身兩任五考、攝官出判司三任七考、並入錄事參軍、但有舉主四人、或有合使舉主二人、並許通注縣令、流外出身四任十考、入錄事參軍、進納出身三任七考、曹(漕)省試下第二任五考、入下州令錄、仍差監當。
- (16) 合使の二字が良くわからない。轉運使などの高級職にあたっている、あるいは資序に合するという意味か。
- (17) 宋史卷一五八、選舉四、每任以三周年爲限、閏月不預、每周一年、校成一考、其常考、依令錄例、書中上、公事遺闕、曾經殿罰者、卽降考一等、若考成殊考、則南曹其考績、請行酬獎。
- (18) 宋史卷一六九、注(15)のつづき。
- (19) 前注に引續いて、判司簿尉、舉職官。有出身四考、有舉主三人、移初等職官、仍差知縣。有出身四考、無出身六考、注初等職官、有出身六考、無出身七考、注兩使職官。とある。
- (20) 宋史卷一六九、職官九、循資・磨勘の條。判司簿尉七考、知令錄・職官六考、有京官舉主五人、內一員轉運使副或提刑、並磨勘引見、轉合入京朝官。
- (21) 古垣光一「宋眞宗時代磨勘の制の成立について」(『青山博士古稀紀念宋代史論叢』一九七四)。
- (22) 宋會要食貨五一ノ二二、至道元年七月條、長編卷一〇四、天聖四年七月壬戌の條。
- (23) 五代會要卷二十一、選事下。
- (24) 長編卷三十四、淳化四年春正月丙戌。以磨勘京朝官院、爲審官院。幕職州縣官院爲考課院。時金部員外郎謝泌言、磨勘之名、非典訓也、故易之。謝泌の傳は宋史卷三〇六にみえる。

宋初の寄祿官とその周邊

- (25) 長編卷二十四、太平興國八年十二月。田錫上言(中略)。今則於中書外廡、置磨勘一司、較朝臣考課之有無、審州郡勞能之虛實、瞻言是職、本屬考功。豈考功之職不修、而磨勘之名互出、殊非雅稱、深損大綱。
- (26) 長編卷九、開寶元年八月辛酉。令合格選人、到京者、卽赴集。不必限四時、及成甲次、南曹・銓司・門下省三處・磨勘注擬并點檢謝辭等、共給一月限、南曹八日、銓司十五日、門下省七日。これを宋會要選舉二四ノ九、流內銓ではさらに詳しく説明している。(前略)南曹應有納解投狀選人等、自初下納文書・及批判諸司引驗磨勘、直至判成、送銓。都給限八日。銓司應有南曹判成選人、自初到銓・引納家狀、告示逐旋磨勘、便令試判、并覆關注擬、寫省曆及進黃、并引對謝辭等。都給限一十五日。門下省、應有銓司諸色注官人等、點檢告身文字、及移牒諸司、勘會事節、追黃甲、寫奏狀、并引准黃甲等。都給限七日畢(下略)。
- (27) 天子の引見は例えは次のような手續で行なわれる。宋會要選舉二四ノ一〇、景德二年九月。詔流內銓、依審官院例、前一日、具選人歷任進內、次日引對。舊制、每選人赴調、卽檢勘歷任功過并出身以來事蹟、至便殿引對日進呈、帝親閱而甄擢之。至是特令預先進入、且欲詳觀其能否。
- (28) 長編卷六六、景德四年八月辛丑。詔。審官、三班、引對京朝官・使臣、不得過三人(中略)、及吏部銓選人、各不得過十人。其後(中略)吏部銓選人差遣、增至十五人。を始め史料は多いが、宋史卷二八六の王益柔傳では、熙寧ごろのこととして、(益柔)判吏部流內銓。舊制選人當改京官、滿十人乃引見、由是士多困滯、且選舉者有故、輒不用。益柔請才二人、卽引見。衆論翕然稱之。と書かれている。
- (29) 例えは英宗時代、御史中丞の賈黯は、吏部奏舉磨勘選人・未引見者、至二百五十餘人と言い、天聖年間には磨勘改官者、歲才數十人と述べている(宋史一六〇、選舉六、保任)。
- (30) 宋史卷一五八、選舉四、銓法上。
- (31) 新編決科古今源流至論(以下古今源流至論と略稱)別集卷七。舉主。

擇舉主於未用之先、責舉主於已用之後、此古今薦舉之良法也。

- (32) 前注の後文、國朝用人之法、一則曰舉主、二則曰舉主、視漢唐又遠過焉。

- (33) 長編卷一四八、慶曆四年四月丁巳條などはそのまゝだった例の一つである。舉官の實例は宋會要選舉二七〇の舉官の項に列舉されている。

- (34) 宋史卷一五八、選舉四。(前略) 蓋前代朝官、自一品以下、皆曰常參官。其未常參者、曰未常參官。宋曰常參者、曰朝官。祕書郎而下、未嘗常參者、曰京官。なお十駕齋養新錄卷十、升朝官京官を参照。

- (35) 宋史一六九、職官九の敘選では、祕書郎を著作郎の次に入れるが、これは適當でなく、本來は著作佐郎の上に置かれるべきである。

- (36) 慶史卷上、國朝舊制。文臣・京官方許乘馬出入皇城門。其轉職官以下、悉自門外步入。

- (37) 宋史一六三、職官三、吏部。(前略) 除授皆視寄祿官。高一品以上者爲行。下一品者爲守。下二品以下者爲試。品同者不用行守試。

- (38) 燕翼詒謀錄卷一。定試銜官爲七選。國初假試官、乃以恩澤補授、不理選限。太宗皇帝即位、牧伯皆遣子弟、奉貢物爲賀。悉以試七選吏部南曹、赴調引對、始授以官。自後假試、方得齒仕版矣。

- (39) 宋史卷一六九、職官九、試秩。(前略) 右幕職初授、則試祕書省校書郎。再任至兩使推官、則試大理評事。掌書記・支使・防禦・團練判官、則試大理司直・評事。又加則兼監察御史。亦有解褐試大理評事・校書郎・寺監主簿・助教者、謂之試御(銜)。有選集、同出身例。

- (40) 宋史卷三〇九。

- (41) 長編卷一四三、慶曆三年九月丙寅。范仲淹、富弼(中略) 列奏曰(中略) 今文資三年一遷、武職五年一遷、謂之磨勘。このほか、張方平、樂全集卷十八、對手詔一道を参照。宋會要職官十一ノ六以下の磨勘にも多數の史料がある。

- (42) 畫墁錄卷一。在京朝官四年磨勘、元無著令、熙寧中、審官變行之、至今以爲常格。會要では京朝官四年一遷の制ができたのは英宗の治平三

年二月だという(會要職官十一ノ十六ノ十七)。

- (43) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。(前略) 右五等階、號京官。自京官而上、四年一轉。無出身人逐資、有出身人超資。

- (44) 著作佐郎や祕書丞という官名は南北朝時代、特別なイメージを伴っており、その實質は消えても、觀念は宋にまで繼承されているのである(宮崎市定『九品官人法の研究』二四〇、五七一頁参照)。

- (45) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。

- (46) 同前注。(前略) 舊制、凡初擢用京官選人、爲經筵官及臺諫、皆除太子中允。

- (47) 歐陽文忠公文集卷二十八、尹師魯墓誌銘。宋會要選舉三一ノ二九、景祐元年九月十九日の條。

- (48) 歐陽文忠公文集卷二十二、太尉文正王公神道碑銘。(前略) 參知政事李穆子行簡、有賢行。以將作監丞、居于家。眞宗召見、慰勞之。遷太子中允。(中略) 然後人知行簡公(王旦) 所薦也。

- (49) 歐陽文忠公文集卷二十四、石曼卿墓表。

- (50) 宋會要選舉三一ノ二七、天聖五年七月、同三二ノ三一、慶曆二年二月ほか。

- (51) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。(前略) 若無出身人、自大理寺丞、敘選中舍。宰執奏補者、轉贊善。雜科轉洗馬。蓋有以別之。

- (52) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。(前略) 祖宗故事、進士第一人初命官、以將作監丞。遷著作郎、遷左右正言。同卷の別の部分では、昔之正言・監察御史・著作郎、皆特旨遷。不與太常博士・國子博士及三丞等。とみえる。

- (53) 荒木敏一『宋代科舉制度研究』(東洋史研究會、一九六九) 三四六頁以下參看。

- (54) 歐陽文忠公文集卷一一四、又論館閣取士劄子。臣竊以館閣之職、號爲育材之地。今兩府闕人、則必取於兩制、兩制闕人、則必取於館閣。然則館閣輔相養材之地也。

- (55) 宋史卷一六二、職官二では、兩者を一應區別して、學士之職、資望極

峻。無吏守、無職掌。惟出入侍從、備顧問而已、其次與論議、典校讐と述べる。

- (56) 麟臺故事卷一、沿革の部分、長編卷一九、太平興國三年二月丙辰ほか。宋史卷一六一、職官一。(前略) 其上相爲昭文館大學士・監修國史。其次爲集賢殿大學士。或置三相、則昭文・集賢二學士、併監修國史。各除。唐以來三大館、背宰臣兼、故仍其制。また春明退朝錄卷上、參看。

- (57) 長編卷三十一、淳化元年二月辛酉。(前略)、國家因唐制、建昭文・史館・集賢院於禁中。昭文・集賢置大學士・直學士。史館置監修國史・修撰・直館。昭文亦置直館。集賢又有修撰・校理之職。名數雖異、而職務略同。

- (58) 彼らの實務については、宋會要崇儒四ノ一、勸書の各條を参照。館職の給料は、直閣以上は添支錢(特別手當)があつてまだでしたが、ここでいう下級館職は甚だ薄給であつた。老學庵筆記卷四には次の如くいう。館職常苦俸薄、而吏人食錢甚厚、周子允(必大)作正字時、嘗戲曰、豈所謂省官不如省吏耶。都下舊謂館職、爲省官故云。

- (59) 麟臺故事卷三、選任。景祐三年四月、宰臣文彥博言。(中略) 殿中丞王安石、進士第四人及第、舊制、一任選、進所業、求試館職。安石凡數任、並無所陳。朝廷特令召試、而亦辭以家貧親老。且文館之職、士人所欲、而安石恬然自守。未易多得。

- (60) 注(54)の續き。一、舊制、館閣取人以三路。進士高科一路也。大臣薦舉一路也。歲月磨勞一路也。進士第三人以上及第者、并制科及第者、不問等第、並只一任替同、便試館職。進士第四第五人、經兩任、亦得試。此一路也。兩府臣僚初拜命、各舉三兩人、即時召試。此一路也。其餘歷任繁難久次、或寄任重處者、特令帶職。此一路也。

- (61) 一般的には館職を加えられたことを帶職、他の官であつて館職を加えられた者と貼職という。ほぼ同じ意味に使われるが、外官で職を加えられた場合に貼職という方が多いようである。

- (62) 宋會要選舉三一ノ二七、同三一ノ二九。

- (63) 宋初の寄祿官とその周邊

- (64) 長編卷一四五、慶曆三年十一月癸未。諫官歐陽脩言(中略) 加又比來館閣之中、大半膏粱之子。材臣幹吏、羞與比肩。(中略) 臣竊見。近年風俗偷薄・士子奔競者、至有偷竊他人文字、干謁權貴、以求薦舉、如邱良孫者、又有廣費資財、多寫文冊、事業又非絕出、而惟務干求勢門、日夜奔馳、無一處不到、如林槩者。(中略) 此蓋朝廷、爲見近年貴家子弟、濫在館閣者多。如呂公綽、錢延年之類、尤爲荒濫。

- (65) 呂公綽は天聖十年二月十九日、試大理寺丞でテストを受け賦稍優、詩稍堪で集賢校理になつてゐる(宋會要選舉三一ノ二八)。なお呂氏のことは、衣川強「宋代の名族——河南呂氏の場合——」(「神戸商大人文論集、九卷一・二號、一九七三」)が論じる。

- (66) 長編卷一六六、皇祐元年六月丁亥。監察御史陳旭言。竊以三館職事、文儒之高選。近時無復典故、用人益輕、遂爲貴游進取之要津。

- (67) 長編卷一四五、慶曆三年十一月癸未。詔。自京(人)見任前任兩府及大兩省以上官、不得陳乞子弟親戚館職・并讀書之類。進士三人以上、一任內(同)無過犯者、許進著述、召試。取優等者(充)。遇館職闕、取曾有兩府二人・兩省三人同罪舉充者。仍取著述、看詳試補。

- (68) 試驗が學士院か舍人院で實施されるのは翰林學士か中書舍人(知制誥)を主査とすることで權威づけがはかられたためであらう。ただどちらで行なわれるかはその時々で一定していなかったように思われる。却掃編卷下。舊制。召試館職、詩賦各一篇。治平中、東坡被召。自言久去場屋、不能爲詩賦。乃特詔試論二篇。神宗時御史吳申言、試館職止於詩賦、非經國治民之急。請罷詩賦、試策三道、問經史時務。每道問十事以上、以通否、定高下去留。なお宋會要選舉三一ノ三六、治平四年閏三月十一日、同三一ノ三七、熙寧元年八月二十六日などの條を参照。

- (69) 宋會要選舉三一ノ二六。

- (70) 麟臺故事拾遺卷上、選任の項。長編卷一一五、皇祐元年秋七月辛卯。翰林學士承旨盛度等、上所定學士・舍人院召試人等第。以文理俱高・爲第一。文理俱通・爲第二。文通理粗、或文粗理通・爲第三・分上下。

- (71) 麟臺故事拾遺卷上、選任の項。長編卷一一五、皇祐元年秋七月辛卯。翰林學士承旨盛度等、上所定學士・舍人院召試人等第。以文理俱高・爲第一。文理俱通・爲第二。文通理粗、或文粗理通・爲第三・分上下。

文理俱粗・爲第四・分士下。紕繆・爲第五。凡七等。先是、考校舊規、有優・稍優・堪・稍堪・平・堪次・低七等。而品第高下未明。至是、度等約禮部式、更定之。

(73) 宋史職官志卷一六四、職官四、祕書省。天禧初、令以三館爲額。置檢討・校勘等員。檢討以京朝官充、校勘自京朝幕職至選人、皆得備選。(中略) 祕閣。置直閣、以朝官充。校理以京朝官充。

(74) 歐陽文忠公文集卷一一四、又論館閣取士劄子。(前略) 一、新制。館閣共置編校八員。本爲館中書籍久不齊整、而館職多別有差遣、不能專一校正。乃別置此八員、故選新進資淺人、令久任而專一校讀。所以先令作編校二年、然後陞爲校勘(未是正館職)。爲校勘四年、然後陞爲校理(始是正館職)。爲校理又一年、方罷、授別任差遣。なお編校書籍官については麟臺故事卷三、選任の嘉祐の條を参照。

(75) 麟臺故事卷三、選任。(前略) 故事館閣兼職、與邊轉不同(中略) 其餘大率・祕閣校理遷直祕閣、集賢校理遷直集賢院、或直龍圖閣。

(76) 麟臺故事卷三、選任。(前略) 景德初、直祕閣杜鎬、祕閣校理戚綸、皆以舊職、充龍圖閣待制。後數年、鎬以司封郎中・直祕閣、充龍圖閣待制、遷右遷議大夫・龍圖閣直學士、亦異恩也。

(77) 宋會要職官三・一三二、慶曆八年十一月十七日。學士院試大理寺丞國子監直講司馬光、賦詩三下。詔充館閣校勘、候二年、除校理、以知(參)知政事龐籍薦、命試。

(78) 宋史卷一六八職官八、建隆以後合班之制。合班とは要するに、文・武・寄祿・館職・差遣など次元の異なるものを一つの宮中序列に統合づけることである。因みに宋では合班を雜壓とも呼ぶ。これまた磨勘と同じく何とも雅でない吏語で、「ごちゃごちゃぎゅっ」といっしょにした、というニエンスを持つと思われる。朝野類要卷二、雜壓参照。

(79) 朝野類要卷二、侍從。翰林學士・給事中・六尚書侍郎・是也。又中書舍人・左右史以次、謂之小侍從。又在外帶諸閣學士・待制者、謂之在外侍從。

(80) 宋史卷一六二、職官二。總閣學士の各條。

(81) 長編卷四四、咸平二年閏三月庚寅。同卷五十、咸平四年十一月丁亥、には龍圖閣の名がみえる。前者の脚注に咸平年間すでに龍圖閣が存在することを指摘するが、職官志などは、大中祥符年間に作られたと言う。

(82) 長編卷九六、天禧四年十一月壬戌。

(83) 宋會要職官七・一七一、嘉祐八年八月十二日。宋史卷一六二、職官三、實文閣學士の條。石林燕語卷六には次のように言う。天禧初、因建天章・壽昌兩閣於後。而以天章、藏御集、虛壽昌閣未用。慶曆初、改壽昌爲實文、仁宗亦以藏御集。二閣皆二帝時所自命也。

(84) 宋史卷三六、包拯傳。

(85) 却掃編卷上。國朝創立諸閣、以藏祖宗御製。每閣皆置學士・直學士・待制。謂之侍從官。然學士直學士、例以閣名爲官稱。惟天章難以爲稱。初置時、嘗以王贊爲直學士。其後不復有、止除待制而已。初諸閣唯龍圖有直閣、館職之久次與帥臣監司之有勤勞者、乃得之。また職官志三の天章閣の項では南宋の秦檜のこととして、自願謫閣、進直天章閣。以稱呼非便、辭。詔改龍圖。自是天章不爲帶職。という。

(86) 後唐の樞密直學士は、後梁の開平二年に置かれた崇政院學士(五代會要卷二四、樞密使)をつぐとも言われる(事物紀原卷四、樞直)。石林燕語卷二。(前略) 至(後唐) 明宗時、安重晦爲樞密使。明宗既不知書、而重晦又武人、故孔循始議置端明殿學士二人、專備顧問、以馮道・趙鳳爲之。班翰林學士上、蓋樞密院職事官也。本朝樞密院官既備學士之職浸廢。(中略) 亦不多除人。官制行、乃與學士皆爲職名(學士上疑有脫字)、爲直學士之冠、不隸樞密院(中略)。每吏部尚書補外除龍圖閣學士、戶部以下五曹、則除樞密直學士。相呼謂之密學。その他宋會要職官七・一九、樞密直學士の項。

(87) 石林燕語卷一及び卷二參照。

(88) 宋史卷一六二、職官三。翰林侍讀學士以下。

(89) 事物紀原卷四、端明。

(90) 長編卷一三三、明道二年八月丁巳。置端明殿學士。班在翰林學士之下。

以翰林侍讀學士兼龍圖閣學士末授爲之。太平興國五年、改端明殿學士、爲文明殿學士、班樞密副使之下。自程羽・李昉後、不復除授（中略）於是、復置學士、與文明之職並見、而班益降矣。

- (91) 宋史卷一六二、職官三、端明殿學士。（中略）、自明道訖元豐、無前執政爲之者、僅以待學士之久次者。

注（91）の以下の文。

- (92) 宋史卷一六二、職官三、資政殿大學士。宋會要職官七ノ二〇、資政殿學士。石林燕語卷六などを参照。

- (94) 宋史卷一六二、職官三、觀文殿學士。宋會要職官七ノ六、文明殿學士を参照。

- (95) こうした館職を簡便にまとめた記事としては、梁谿漫志卷一、本朝殿閣建官と、容齋隨筆卷十六、館職名存があげられる。

- (96) 臺官は糾劾に任じ、諫官は議論に任じるのが本来の職務であった。しかし宋では、諫臣使之諫諍、而不使之糾劾、臺臣使之糾劾、而又使之諫諍（古今源流至論前集卷六臺諫）といわれるように、臺官も議論に加われるところに特色があった。

- (97) 宋史卷一六四、職官四、御史臺。

- (98) 古今源流至論、續集卷六、臺官。

- (99) 古今源流至論、續集卷六、諫垣。事物紀原卷五、諫議、二起居、諫正の各條。

- (100) 長編卷二九、端拱元年二月。上以補闕・拾遺、任當獻納。時多循默、失建官本意、欲立新名、使各修其職業。二月乙未、改左右補闕、爲左右司諫。左右拾遺、爲左右正言。

- (101) 宋史卷一六一、職官一、左散騎常侍。國初雖置諫院、知院官凡六員、以司諫・正言、充職。而他官領者、謂之知諫院。

- (102) 長編卷八九、天禧元年二月丁丑。詔別置諫官御史各六員、增其月俸、不兼他職。每月・須一員奏事。或有急務、聽非時入封、及三年、則黜其不勝任者。なおくわしくは宋會要職官三ノ五一、天禧元年二月七日條にみえる。

宋初の寄祿官とその周邊

- (103) 前注の長編には別置という字があり、これを會要では、自今兩省置諫官六員、御史臺、除中丞・知雜・推直官外、置侍御史以下六員といいかえている。

- (104) たとえば司馬光は自分の履歷を列記して、此皆朝廷清要之職という中に、諫官と御史中丞も加えている。司馬溫公文集卷二八、辭樞密副使第三劄子。清要の定義を、朝野類要は次のように與える。職慢位顯、謂之清、職繁而位顯、謂之要。兼此二者、謂之清要。

- (105) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。（前略）凡雜流出身、自國子博士、轉水部・司門・庫部員外郎。若擢省府判推官・提點刑獄、即自水部遷倉部、司門遷考功、庫部遷膳部郎中、此等遷改絕稀。

- (106) 宋史卷一六九、職官九、敘遷的中行郎中のおとに、右常調、（中略）內有出身、自屯田、無出身自虞部、贓罪敘復人、自水部轉とある。

前注（105）参照。

- (108) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。凡待世賞、自國子博士、轉虞部・比部・駕部員外郎。若曾任省府推判官・提點刑獄以上、即轉主客・金部・司勳員外郎、若官已係虞部、即遷金部、比部即遷司勳、駕部即遷主客郎中。

- (109) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。凡進士出身人、自太常博士、遂遷屯田・都官・職方員外郎、若任省府推判官・提點刑獄・或館職、即遷祠部・度支・司封員外郎。若官已係屯田、即遷度支、都官即遷司封員外郎、職方郎轉祠部郎中。

- (110) 宋史卷一六九、職官九、敘遷、中行郎中以下の文。

注（105）（108）（109）参照。

- (112) 琬琰集刪存卷二、王文正公會行狀。

- (113) 宋史卷二九三。

- (114) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。故狀元登第者、初命官以將作監丞、兩遷左司諫、次轉起居舍人・兵部員外郎。多官未及此、以擢知制誥。若左右司諫・帶待制以上職、遷吏部員外郎。起居舍人・帶待制以上職、遷禮部郎中、次轉吏部郎中、次轉右諫議大夫。



- (115) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖、中大夫の條。
- (116) 宋史一六九、職官九、敘遷。帶待制已上職、左・右曹・右名實、轉左名曹。仍隔一資、超轉。中行郎中、轉左右司郎中。(戶部轉左司、刑部・度支・金部・倉部・都官・比部・司門、轉右司)。
- (117) 却掃編卷上。國朝參知政事・樞密副使、必以諫議大夫、爲之。權御史中丞亦然。
- (118) さしあたり、注(1)宮崎論文四三頁を参照。
- (119) 宋史卷一六九、職官九、敘遷。大理評事、(前略)無出身、(中略)審刑院詳議・刑部詳覆・詳斷・檢法・法直官、轉光祿寺丞。この實例は第七表の明經中第の胡儀にみられる。
- (120) 宮崎市定「宋元時代の法制と裁判機構」(『アジア史研究』第四、一九六四所收)。
- (121) 本來中書堂後官は堂吏と呼ばれるように高級胥吏のポストであったが、宋に入つてここにも選人を登用するようになった。その経緯は、燕翼貽謀錄卷一、堂吏用士人、に詳述されている。
- (122) 宋史卷一六九、職官九、敘遷の中行郎中の條下。
- (123) 史料は極めて多いが、とりあえず、古今源流至論後集卷二、兩制、續集卷六、翰苑を參看。
- (124) 前注、天子私人、世以爲貴。榮矣哉・鑾坡之選也(翰林學士)。宰相判官、世所推重。榮矣哉・鳳閣之選也。
- (125) 事物紀原卷四、制誥。文獻通考卷五四、職官八、學士院以下。
- (126) 古今源流至論後集卷二、兩制。(前略)國朝未改官制之前、翰林學士帶知制誥者、乃其爲內制之職。而他官帶知制誥者、爲外制之職。
- (127) 宋會要職官六ノ六五、至道三年四月。以工部郎中史館修撰梁周翰、爲駕部郎中知制誥。故尋入西閣、皆中書召試制誥三篇。二篇各二百字、一篇百字。維周翰不召試而授焉。其後薛映・梁鼎・楊億・陳堯佐・歐陽脩亦如此例。また會要職官三ノ一七、元豐四年七月十三日。編定應試知制誥、並召赴中書、試制誥三道、各限一百五十字已上成。進呈取旨。
- (128) 古今源流至論前集卷六、階官沿革圖。(前略)舊制、初除知制誥及待制、而官未至員外郎者、即除右正言。
- (129) 前注(126)除(神宗)早聞人言、朝廷一命知制誥(この場合は翰林學士)、六姻相賀、以謂一佛化世。
- (130) 宋史卷一六一、職官一、三師三公。
- (131) 國朝諸臣奏議卷六十九、丁隱・上哲宗論寄祿官宜分左右。(前略)夫聖人、用名爲教。故爲之差別品類、辨明科目。一定其號、人不敢有覬望之心・僥倖之意。今賢愚混淆、清濁同流、非所以爲善處天下之物也。前注の奏議參照。なおこの他、國朝諸臣奏議卷六十九、畢仲游、上哲宗論官制之失陞補之濫も參照。
- (132) (本稿は昭和五十年度文部省科學研究費による「宋代の士大夫階級」研究報告の一部である)